

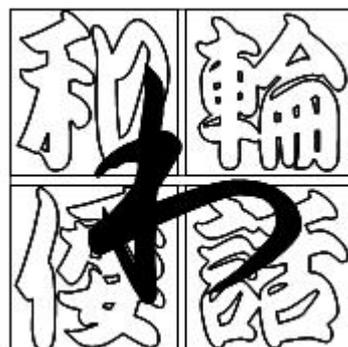
金沢区生涯学習 “わ” の会

会 報 第 40号

平成 24(2012)年 2 月

ホームページ:<http://kanazawa-wanokai.in.cocan.jp/>

メー ル:yokohama.kanazawa.wanokai@gmail.com



会報発行 10 周年記念号

- 10 年を振り返る座談会
- 記念寄稿

「私の選んだ金沢の文化遺産」

「私の生涯学習」「自由テーマ」

記念記事

会報発行 10 周年記念

- 3 会報発行 10 周年記念号について
大門 利晴
- 3 会報発行 10 周年記念号に寄せて
小俣 悦男
- 4 座談会：会報発行 10 年の思い出と展望
高橋好一 小岩克介 金間誠一

記念寄稿：私の選んだ金沢の文化遺産

- 9 古道散策 保土ヶ谷道編
～道端の石造物を愛でながら～
伊澤 尚

目 次

- 10 私の選んだ金沢の文化遺産
熊谷 哲
- 11 私の選んだ金沢の文化遺産
兒玉 國宏
- 12 ペリーが来た金沢の夕べ
～わが祖先との出会い～
佐々木 和彦
- 14 私の選んだ金沢の文化遺産
高橋 好一
- 15 上行寺東遺跡
山田 務

次ページに続く

目次（続き）

記念寄稿：私の生涯学習

- 17 私の生涯学習
飯富 禧子
- 19 古文書抹殺、無念至極に御座候
井上 雄二
- 20 私の古文書のめりこみのきっかけ
真田 雅行
- 21 ライフワーク
深澤 勝美
- 22 私の生涯学習
宮原 宏至
- 22 私の生涯学習
山本 千鶴子

記念寄稿：自由テーマ

- 23 “わ”の会の思い出と雑感
池谷 春夫
- 24 社会教育会館の思い出
小岩 克介
- 25 視点・金沢区の駅名から
堀井 克子

通常記事

運営委員会からのお知らせ

- 26 分科会代表との連絡会議報告
- 28 フォーラム KANAZAWA の
ご案内
- 28 継続会員の状況と新会員募集
- 29 “わ”の会用ノートパソコン購入

学習会

- 30 学習会の概要とアンケート結果

分科会からの便り

- 31 「寺社を巡る会」10周年記念
講演要旨
熊谷 哲
- 33 「寺社を巡る会」
駿河路バス旅行記
浜崎 弘和
- 35 「寺社を巡る会」
初冬の駿河路は太陽がいっぱい
渡邊 紀一
- 38 「懐かしの映画」鑑賞録 No.5
佐藤 晃
- 41 「浮雲俳句会」抄録 No.16
北野 清市

歴史研究

- 45 『吾妻鑑』を読む (3)
小倉 英明
- 46 意外と身近な古文書・古典籍
沓掛 勝利

会員短信

- 47 会員の著書紹介
- 47 訃報

行事予定

- 48 3月～5月の予定

〈注〉 記念寄稿の掲載順はテーマ毎に50音順

会報発行10周年記念号について

編集委員長 大門 利晴

8月の39号編集委員会の際、次の40号は10周年にあたるので記念号をとの声が挙がりました。もちろん全員賛成。については、何か新しい試みをとということになり、テーマを決めた会員からの寄稿と10年を振り返っての座談会記事の掲載、表紙のデザインを一新してはということになりました。加えて会報の名前が単に「会報」では？との声も上がりました。

金沢の生涯学習団体よろしく 1) テーマ寄稿「私の選んだ金沢の文化遺産」「私の生涯学習」と 2) 会報名 3) 表紙デザインを募集することにし、9月の学習会でアナウンスをしました。

ところが反応が今一つ、編集委員会はいささか慌てました。そこでテーマ自由を含めて個別にお願いしたところ、たくさんの寄稿をいただき、今度は嬉しい悲鳴と相成りました。“わ”の会会員の實力の程を改めて実感したところです。

その結果、1) の寄稿は16件という多きに至り、2) 会報名は「かねさわ」「かねざわ」「とわに」「なごみ」の4件、3) デザインは1件となりました。編集委員会はこれを検討、1) は折角の寄稿、全部を掲載することにし、2) は先に発行した「かねざわの歴史事典」との整合性から「かねざわ」を採用、3) は凝ったデザインでしたが表紙にするにはいささか目立ち過ぎではないかということとで不採択、「かねざわ」の字体・大きさを変え次の41号に先延ばしすることにしました。

以上の次第で10年を振り返った座談会記事と通常記事を含めると48ページに至ることになり、今回のスタイルとなりました。

次の15年、20年に向けて持続・発展するよう、われわれ編集委員は努力する所存です。皆様のご指導・ご支援をお願いいたします。

会報発行10周年記念号に寄せて

代表 小俣 悦男

“わ”の会が創設4年目に自主運営へ移行したのを機に、平成14年5月に会報第1号が発行されました。このときは表紙を含めB5判4ページでした。爾来10年、歴史研究や分科会活動状況などの発表の場として利用して頂けるよう、また一方で、「運営委員からのお知らせ」など双方向性を意識した誌面作りに努め、会員皆様方の絆の役割を担って今日に至っております。ご存知のように学習会と分科会が車の両輪の如く役割を果たしてこられたのも会報とホームページの横糸機能を持った存在が大きいといえましょう。

さて今回の記念号に寄せられた会員皆様方の文書を事前に拝読させて頂きました。“私の金沢の文化遺産”のテーマに対し、切り口が多岐にわたっているだけでなく内容も素晴らしいも

のばかりです。日頃の研鑽ぶりとこの金沢への思い入れが伝わって参りました。一方“私の生涯学習”はそれぞれの方々々が信念を持って歩んできた生き様の面目躍如さが伝わってきて素直に胸が打たれました。自由テーマについても読み応えの有るものばかりです。とはいえ今回も執筆者は限られた会員です。会報をさらに身近なものにして行く観点からも双方向性を重視した誌面作りが今後とも欠かせません。それには会員皆様方に積極的に原稿をお寄せ頂く事が不可欠です。何卒よろしくご理解を賜りたくお願い申し上げます。

なお今回の記念号発行に際し特段のご尽力を頂きました編集委員各位並びに執筆者の皆様方に衷心より厚くお礼を申し上げます。

座談会：会報発行10年の思い出と展望

高橋 好一 小岩 克介 金間 誠一

“わ”の会会報創刊10周年に当たり、会報創刊時(2002/5)に“わ”の会代表であった高橋好一さん、創刊から昨年度まで会報編集委員長を務めた小岩克介さん、7号(2003/11)から会報編集委員に加わった金間誠一さんの3人に集まっていただき、これまでの10年間の思い出と今後の展望を語っていただきました。司会は現会報編集委員長の大門が担当しました。

1. 会報創刊の動機と目的

司会：まずは会報創刊時に“わ”の会代表であった高橋さんから創刊の動機を話して頂きましょうか。

高橋：そうですね。2001年度が始まると、翌年の2002年度からは、“わ”の会創設から丸3年が経ち、金沢区からの委託事業を卒業して、独立した生涯学習団体として自主的な運営になるということで、運営委員会としては重大な曲がり角にきました。その際に、自主運営に向けて掲げたのが3つの方針で、継続会員制への移行・分科会の設立・会報の発行でした。これは“わ”の会において会員の学習意欲をさらに高め、会員間の親睦をより深めるためにと考えたものです。

金間：少し詳しくお話頂けませんか。その当時、私を含めて“わ”の会会員でなかった会員も多いですから。

高橋：“わ”の会が金沢区役所からの委託事業であった3年間は、機会均等を期するためのルールで毎年全会員をあらためて募集しておしていました。しかし、それでは抽選に漏れると継続して会員になれないという危惧がありました。それで独立を機に継続希望者は優先して会員になれるという継続会員制を採用することにしました。つぎに、全員参加の学習会に加えて、さらに会員同士の距離を縮め、接触を深める場として同好の会員をメンバーとする

分科会を設けることにしました。さらに、“わ”の会全体や各分科会の動向と個々の会員の思いなどを全会員に伝える会報を発行することにした訳です。

2. 会報発行体制と方針

司会：それで会報を具体的に発行するに当たってどうされたのですか。

高橋：まずは会報発行責任者の選任ということで、当時、広報を担当していた運営委員の小岩さんが編集委員長になった訳です。

小岩：私は2001年に会員になり、その年の探訪に参加した直後から運営委員会に参加するようになりました。探訪の際のアンケートに答えた内容がもとで運営委員に一本釣りにされたような気がします。広報担当として活動を始めましたが、会報発行の話が具体的になり、編集に当たることになりました。

司会：創刊に当たっての編集方針はどのようなものでしたか？

小岩：いや、そういわれても難しい。会報の記事としては、ただ、“わ”の会全体の活動状況を会員の皆様知ってもらおうという一心だったような気がします。勿論、同時に設立された分科会の機関紙的な役割も果たそうという狙いもありました。

高橋：横浜市内にも歴史に関する会が発行する会報はたくさんありますが、会員の研究成

果の掲載が殆どで、会そのものの動きを知ってもらうという視点のものはなかったと思います。これが“わ”の会会報の特徴で、第1の編集方針でしょう。8号から「運営委員会からのお知らせ」として明確に括って、運営委員会の動きをページのトップに持ってきたのは良かったです。5号からは裏表紙に分科会の行事予定表を掲載することが定着しましたが、分科会全体の動きが全会員に伝わるようになり、これも良かったです。今後も続けて欲しいですね。

3. 表紙デザインとシンボルマーク

小岩：会報創刊でもう一つ。会報の表紙を飾るために“わ”の会のシンボルマークを作ろうと苦労した記憶があります。

高橋：シンボルマークに組み合わせる文字ですが、和、輪、倭、話とひらがなの「わ」の解釈4文字が定まった。

小岩：そして、最後はシンボルマークとしてのデザインですが、これは当時運営委員であった小澤妙子さんにパソコン上でデザインをしてもらった。小澤さんは個展を開くほどに美術に長けており、また実務で培ったパソコンの力も相当なもので、お陰であの素晴らしいシンボルマークが誕生しました。

金間：余談ですが、そのシンボルマークはホームページのトップにもアップ。また、探訪時などに利用される旗にもなりました。その時のシンボルマークのカラー化も小澤さんが担当しました。その他、“わ”の会発行の印刷物の表紙に機会ある毎に掲載され、会員のみならず区民の皆さんに親しまれています。

4. 創刊号発行

小岩：そんな訳で創刊号はシンボルマークで表紙一面を飾り、高橋さんの自立への思いを含めた創刊の辞を主体とし、講座の年間予定表、分科会会員および会報編集委員募集、編集後記の構成で、2002年5月に発行しました。表紙を含めてB5判の4ページ仕立てで、シンプル

なスタートでした。

5. 創刊時代の編集作業

金間：その創刊号を拝見すると切り張りをしたりして苦労の跡が伺えますが。

小岩：そう。当時副代表の宮原宏至さんが苦労してワープロに入力したものを切っては貼り付けをして印刷用の原版を作りました。初期の立上・定着時には本当に宮原さんの苦労に依存するものがありました。

6. 会報の内容充実と原稿集め

金間：2号では講座ごとのアンケート結果報告、分科会の予定、会員の寄稿、3号では創設から4年間の“わ”の会の活動報告、年度始めから活動を開始して半年の各分科会の活動状況報告など、記事内容の工夫とページ増があり、1年目最後の4号からはA4判にサイズアップされており、回を追って充実してきますね。

高橋：最初の1年は試行錯誤の連続でした。4号で原稿募集、5号には「会員からの寄稿」にそれを反映出来ました。

金間：継続した会報発行となると、先々誰に何を書いてもらうか、どう頼むかなど、原稿集めが大変ですが、苦労されたのではないですか？

小岩：いやー。行事予定など、運営委員会の決めたことを記事にするだけでしたらそんなに苦労はありませんでしたよ。でも、その他の記事については書いてくれそうな会員を探すのには一苦労でした。でも回を重ねるごとに、いろんな会員に出会い、人脈の幅が広がって苦労が苦労でなくなりました。原稿集めはそういう機会を与えてくれたものと今では感謝しています。

高橋：飄々とした小岩さんから頼まれると断れない雰囲気になるのが不思議でした。その上、今度はそのフォローが厳しかったのを思い出します。

小岩：原稿をわざわざ持ってきてくれた会員

もいた。でも正直、北野清市さんの「寺社を巡る会」の定例巡拝に参加しての「鎌倉俳句寺社巡り」や、真田雅行さんの「中山道六十九次紀行」などの長期連載記事があると大変助かりました。

集める苦勞が少ない連載ものといえば、北野さんの俳句記事は、その後「浮雲俳句会」が発足、分科会の活動成果を定期的に伝える抄録連載に発展しました。当時の北野さんの原稿は手書きで、その電子化は私が担当しましたが、俳句記事は難しい漢字や言葉使いがあり、北野さんとやり取りしながら進めました。

高橋：そう言えば小岩さんは「浮雲俳句会」における北野さんの一番弟子でしたね。

小岩：そして後には「懐かしの映画を観る会」の活動状況を定期的に伝えるものとして佐藤晃さんの簡潔にして分かり易い「懐かしの映画」鑑賞録の連載に至ることになりました。

司会：小岩さん、会員個人からの寄稿もたくさん掲載されていますが、その原稿集めのコツはなんですか？

小岩：学習会の席上での呼びかけや会報での募集案内だけでは駄目で「一本釣り」をしないと集まりませんね。分科会の中にキーパーソンを見つけ出しその繋がりからとか。書く能力と意思を持っている会員は沢山いると思います。書きたくてウズウズしている人も多いと思います。それをいかに探し出すかポイント。探訪は多くの会員と話せる時間があり、投稿依頼絶好のチャンスでした。

金間：高橋さんが打ち出した分科会の仕掛けが功を奏しているのですね。

高橋：話はそれるが、分科会といえば、今は6つですね。分科会に入っていない会員もいますよね。入りたい分科会がないのか、他で活動しているのか分からないですね。何らかのモニターが必要かも。新しく分科会を作るとすると、「藤沢周平を読む」「吾妻鏡を読む」とか。でも言い出しっぺがやらなくちゃならないし。

7. 紙面レイアウトの改善

高橋：ところで金間さんが会報編集に加わったのはいつごろでしたか？

金間：正式に運営委員になったのは2004年からですが、2003年10月から運営委員会に参加しましたので、7号(2003/11)からです。経験豊かな運営委員会の面々に囲まれて、新参の自分にできることはパソコンの使用経験を生かすことぐらいと考えました。当時切り張りで作っていた会報を見て、集まった原稿をパソコンで処理して印刷原稿にまとめることを引受けました。最初に手がけた7号は原稿をもらって、それまでの号をまねて配列・整形しただけでした。8号からは、見栄えや読みやすさを考える必要があると考えて、類似の会報や雑誌の紙面作りを調べたり、ワードのマニュアルを読んだりして、記事種別の見出しを加えたり、記事のタイトルを大きく・太くしたり、スペース部分に挿絵を加えるなどの処理をしました。そして、9号からは表紙に号数に加えて発行年月を入れ、原稿が充実しページ数が増えてきたので目次を加えました。各記事のタイトルと筆者を大きな太字で表示し、さらにそれらを枠で囲んだスタイルで統一し、すっきり、かつ見やすくしました。本文は2段組として、1行を短くして、読みやすくしました。イラストに加えて写真の導入も行いました。この9号で、各記事の表題部分と本文の姿は今日のものと同じになりました。

小岩：金間さんが加わり、編集感覚・パソコン技術、そしてなによりもその熱意によって、紙面が号を重ねる毎に洗練されてきたのを実感しています。

高橋：小岩さんの原稿集めと金間さんの紙面レイアウトはいいコンビだった。

8. 編集上の悩み

金間：レイアウトや飾り付けの問題は編集者の自由になる問題ですが、その集まった原稿の内容に関わる問題にどう取組むかに悩みます。

特に、会員個人の寄稿についてはそうです。

「誤字・脱字」や「社会的に不適切な用語や表現」を除いて、「原稿のまま掲載する」という意見もあります。しかし、失礼ながら、句読点や段落の取り方が乱雑、用語や言い回しが不統一、さらには文法上の乱れなどが散見される原稿もあり、集まったものをそのまま掲載すると、読みづらい、意味が分かりづらいなどの会報発行が続き、その内に折角苦勞して発行しても読まれない会報になってしまう恐れが十分にあるという現実もあります。一方、会報の本文は2段組とし、10.5ポイントの文字を利用し、1行の文字数は20文字と定めていますが、この形式に変換しただけで、改行位置が変化して、「原稿のまま掲載」とは行かなくなっているという事実があります。

読んでもらえる会報であり続けるには「品位」と「読みやすさ」を保ち続けなければなりません、原稿内容にどの程度まで関わってよいのか悩ましいところです。

9. 印象に残る記事・企画

司会: 小岩さん、長年の会報編集の中で特に印象に残ったことは？

小岩: 2005年12月に開催された自主講座「六浦・金沢の地名と地形」の納富優さんの講演を原稿化した時のことですが、講演を聞いた時は良く分かったが、テープをそのまま文章にすると意味が分からなくなる。それを整理して5回に分けて連載した。これにはエネルギーを要しました。

司会: 2007年に節目の5周年を迎え、特集号を企画しました。その時のことで小岩さんが思い出すことは？

小岩: 20号で、「会報発行5周年を迎えて」と題した投稿を呼び掛けましたが、期限が来ても応募なしに近い状況で、些か慌てました。そこで編集委員会を招集、改めて分担して分科会の会場に出かけたり、個人的に呼びかけたりしたところ、20余の原稿が集まりました。先程

話しましたが「待ちでは駄目、積極的に声を掛けなきゃ」と痛感しました。

司会: 痛一。お恥ずかしい。今回の会報創刊10周年記念号も同じことの繰り返しです。反応が今一つで先日の編集委員会で各自分担して投稿をお願いすることになり、やっと見通しがつきました。学習効果ゼロ、反省します。

10. 表紙の変遷

金間: この5周年を記念に会報の表紙デザインも変えました。そのデザインが現在まで続いています。

創刊号から10号までの初代の表紙は“わ”の会マークが表紙の大部分を占めていました。

2代目の表紙は、2004年11月の11号からで、タイトル部分にホームページアドレスとメールアドレスを追記して枠内に収め、表紙の上部に押し上げて配置し、さらに“わ”の会マークを小さくして、タイトル枠の左下に移し、空いたスペースに“わ”の会マークの説明を加えた。その結果、表紙の下半分が空いたので、そこに目次を表紙裏ページから移した。

5周年記念の21号では“わ”の会マークをタイトル枠の右に入れ込み、マークの説明を省略し、新たにできたスペースの一部にその号のトピックスをキーワード的に紹介する欄を設け、残りのスペースを目次欄の拡大に用いた。トピックス欄はリボンで、目次欄はぶどう蔓で枠どりをした。これで表紙の見た目が柔らかくなり、表紙だけでその号の特徴と全体の内容が分かるようになったと思っています。

11. 会報の成果・効用

司会: 10年を振り返って会報の成果にどんなものがあるのでしょうか？

高橋: 成果といういろいろありますが、「運営委員会の方針とその動き」がわかり、「会員の自由な意見交流の場」となったこと、そして、“わ”の会の「データベース」の役割を担っていると思います。

金間：確かに「データベース性」がありますね。「わ」の会 10 年の歩み」を編集するときには非常に参考になりました。

小岩：始めはそういう意識は無かったですねが、結果的にはそのような役割も果たしていたのですね。とにかく「わ」の会活動を会員の方にお知らせする課題は果たせたのではなかったかと思います。

12. 今後の展望

司会：会報の今後に期待することは？

高橋：研究報告もあるだろうが、誰が読んでも「楽しく」「分かりやすい」ようにしてほしいですね。

それに「わ」の会学習会にも言えますが、あくまでも「金沢の歴史」に軸足を置いてほしいです。中世の人文史でなくとも、例えば戦中から戦後にかけてでもよいし、ナウマン象の頃であつてもよい、対象は何であれ金沢と何らかのリンケージがあれば幅広く扱ってもよいのは。

加えて、誰が編集委員になっても会報を続けられる仕組みが必要ですね。

司会：そうですね。最近では毎号ごとに編集委員会を開催し、編集方針と役割分担を決め、役

割分担にしたがって原稿の依頼をしたり、割当の原稿を執筆したりしています。集まった原稿の査読はメールで行い、訂正情報などは編集委員全員で共有し合っています。その後の紙面の割付に入ると一部の委員の負担に偏ってしまう点があり、問題です。

金間：幸い大画面のノートパソコン購入の承認を頂いたので、委員同士がそれを見ながら論議・編集出来る場ができそうです。

司会：課題はいろいろとありますが、編集委員全員が楽しく、文字通り“和”気藹藹と役割を果たしてゆきたいと思っています。そのためには会員の皆さんから沢山の原稿が必要です。この場を借りて改めてお願いします

本日は寒いところをお集まりいただきありがとうございました。高橋さんと小岩さんには今後とも「辛口評論」を含めてよろしく願います。

座談会参加者紹介（「わ」の会での経歴）

高橋好一さん：「わ」の会設立メンバーで、2004 年まで運営委員。その間、2001 年から 2004 年までの 4 年間、第 3 代「わ」の会代表。2005 年の 1 年間は顧問。現在も会員。

小岩克介さん：2001 年度に会員。2002 年度から 2010 年まで運営委員（広報担当）、会報編集委員長。現在も会員。

金間誠一さん：2003 年度に会員。2004 年度から運営委員（広報担当）、会報編集委員、ホームページ委員長。2005 年度から副代表（広報担当）で、会報編集委員、ホームページ委員長を兼務。

編集者注

会報のバックナンバー

「わ」の会ホームページに創刊からの全号が掲載されています。

古道散策 保土ヶ谷道編 ～道端の石造物を愛でながら～

伊澤 尚

「私の選んだ金沢の文化遺産」という恐れ多い表題で何を書いてよいのか当惑してしまう。そんな心境で題のようなことを若干記してみたい。子供の頃よく虫とりやクリ拾いに利用していた道。今になって知る。それが保土ヶ谷道だった。

そんな訳で古道沿い、保土ヶ谷道に散策を求めたいと思う。石造物を探すということに眼目を置き、所在場所をはっきりさせることを目的に、暫らくのお付き合いをよろしく。

さて初めは称名寺の赤門から出発したい。門を西に向かって坂を下って行くと左側に『新編武蔵風土記稿』にも記されている、草履を供えられた「子聖大権現」の祠が櫛の樹下にひっそりと佇むのが目に入る。そこを過ぎ暫らくして三叉路に着く。この三叉路には今は赤門の左脇に移転されている石造の「金沢文庫旧跡」の道案内の道標があった。さらに西に向かうと君が崎交差点に至り、右に曲がると、すぐ傍に君ヶ崎稲荷があり、社の脇に「舟型光背浮彫仏像」などや「無縁仏供養塔」の石造物がある。

先を急ごう。稲荷社を出て北へ向かうと、すぐに右斜めに向かう道が古道であるが、足はそのまま16号沿いに北へと足を運ぼう。暫らくすると左前方に谷津町の火の見櫓が見える。そこに下げられている半鐘はこれから訪ねる能見堂にあった地蔵院のものだ。火の見櫓の下を過ぎ、谷津橋を渡ると斜め前方に「右保土ヶ谷道」云々の石の道標を、左へ進めば前方に塗桶山が見える。塗桶山の頂上には木花咲耶姫を祀る浅間神社が。でもここはひとまず右へと道をたどる。道を左へと曲線を描くように足を運ぶと右側に「庚申塔」三基(文字塔1基、刻像塔2基)の石造物があるのに気付く。中央の「青面金

剛像」の右下部には廃寺になった永泉院の文字が刻されている。そこを過ぎて六国峠ハイキングコース入口に至る。以前この近くに「第六天神」の石碑があったそうだが今は浅間神社の社殿脇に祀られている。ハイキングコースの登り道を行くとすぐに左側に「庚申塔」や「馬頭観音像」などの石造物がある。現在は落石等の危険がる為封鎖されて登れない。一先ず登り口を右に見て道をそのまま辿ると暫らくして右に浅間神社の裏参道登り口に着く。ここも過ぎ、道沿いに行くと表参道の登り口に。昔は塗桶山から白井崎に山が繋がっていたのだが何時の時代にか切通しにした。切通しになる前の道を藤坂(富士坂)と称し、この道を越えて釜利谷へと通じていた。この坂の上にあったと思われる「馬頭観音」の石碑や「五輪塔」紛いの石造物が切通しの釜利谷側に祀られている。

さて古道をたどるといふ趣旨からもう一度保土ヶ谷道へと足を戻そう。先ほど辿ってきた道に戻り、別ルートで六国峠ハイキングコースを辿ることにする。道を端折り、能見台の森にある「谷津関ヶ谷不動尊」を訪れ、小さな石造りの不動尊像を見たい。不動尊の社の後ろを山に沿って登ると六国峠ハイキングコースの途中に出る。このコースを金沢文庫駅方面に戻ると能見堂に着く。「金沢八景根元地」の碑を見てみたい。最近整備され、いくつかの石造物を発見することができる。

雑ばくな散策で恐縮だが、3時間ほどで歩き終える道程である。もう一つ「天照皇大神宮」の碑が浅間神社裏の道を尾根伝いにいくと櫛林の中に見つけることが出来る。六国峠ハイキングコースへ至る別コースの途中でもある。

以上駄弁を弄しながら、書き記した次第である。

私の選んだ金沢の文化遺産

熊谷 哲

わが金沢は源頼朝以来の歴史的地域であり、多くの文化遺産が残されている。『新版かねざわの歴史事典』にも数多く収録した。何れを選ぶか考えれば考える程そろ恐ろしいことである。強いて挙げれば龍華寺を筆頭に幾つかが思い浮かぶ。説明を簡略にするため*印を付した項目は『新版かねざわの歴史事典』の該当項目を参照願いたい。なお景観については「変わりゆく横浜・金沢の風景」のそれぞれの項目をご覧頂きたい。

1. 龍華寺*

(洲崎にある真言宗御室派*の準別格本山)

この寺を金沢の代表的歴史文化遺産として選んだ理由を記す。

- i) 源頼朝*が建立した浄願寺*(旧名は蔵福寺*)と光徳寺*が源。上行寺東遺跡*は重要。
- ii) 頼朝の庶子貞暁*に深い縁がある。貞暁は仁和寺*に入り六浦庄*を領した。
- iii) 幾多の戦乱(上杉氏*など)や自然災害(明応の大地震など)に会いながらも法灯を守った。
- iv) 中世以降の貴重な仏像、宝物や聖教が多数



龍華寺

吉田純一氏撮影

「変わりゆく横浜・金沢の風景」より

残されており、調査分析が期待される。

v) 江戸時代に新田開発を推進した永島氏*の菩提寺、新田開発の歴史が詰まっている。

vi) 現在、真言宗御室派の関東における重要拠点として活発に活動している。

2. 街角の文化遺産

金沢のあちらこちらを見回して 10 件を選びました。

① 浄林寺* : 朝比奈*にある。今は廃寺だが、朝比奈の歴史の凝縮。

② 三艘の文殊堂* : 現在は三艘町内会館の一部、会報 29 号(平成 21 年 5 月)を参照。会報 39 号(平成 23 年 11 月)相川勲『能見堂地藏院の喚鐘』も参照。

③ 榎地藏* : 平潟*にある。水戸光圀*の縁。

④ 小柴の水神社 : 熊野神社の石段下にある。社殿は金沢小学校*の旧奉安殿、水神祭*執行。



小柴の水神社

吉田純一氏撮影

「変わりゆく横浜・金沢の風景」より

⑤ 明治の金沢文庫*の玄関車寄せ : 金沢町公園にある。伊藤博文*が大宝院*に建築。

⑥ 伊丹氏*の五輪塔 : 釜利谷の旧家(伊丹氏の末裔といわれる)にある。

⑦ 畠山重忠*の五輪塔 : 釜利谷の東光禅寺*の門前にある。

⑧東急社宅地域内の横須賀市営水道(旧軍港水道)のマンホール：海軍航空技術廠支廠*施設。県立金沢文庫発行展示図録『大横須賀と金沢』(平成23年6月)のp118も参照。

⑨女体権現社*：富岡町丁字路から東へ200m程の左側崖の上にある。会報27号(平成20年11月)を参照。

⑩富岡総合公園に残る海軍境界標識：長昌寺*と三春学園*の中間の北側裏山にある。横浜海軍航空隊*遺跡。



横須賀市営水道のマンホール

吉田純一氏撮影

私の選んだ金沢の文化遺産

兒玉 國宏

金沢の数ある文化遺産の中で迷いましたが、私は称名寺と県立金沢文庫を選びました。称名寺と県立金沢文庫は鎌倉はもとより金沢の将来の文化的発展の為に継承されるべきものとして、これまでも多大な貢献をしてきましたし、これからもということとは異論のないところかと思えます。

私の推選ポイントは私の全く個人的な思い入れの二つの理由からです。その一つはもう遠くほろ苦い思い出です。南九州から上京しての入学試験の日本史で、称名寺と金沢文庫がセットとして出題されたのです。穴埋め問題でどちらかを記入するものでした。当時見事に知らなくて、それ以来忘れられない名前となりました。まさかその近くに住むことになるろうとは。

もうひとつは同居もしていた私の家内の父母が称名寺に眠っていて檀家であることです。私の家内が天使幼稚園に通っていた幼い頃は称名寺に近い町屋に住んでいたようです。

称名寺と県立金沢文庫を初めて訪れた時の感動といたら……。赤門、石畳の参道、仁王門を抜け、阿字ヶ池、浄土式庭園に呆然と立ち尽くす。鐘楼や本堂、旧館の金沢文庫が迎え

てくれました。季節やその日のお天気や朝だったか昼だったか、今は定かではありません。

称名寺は折々の法会や墓参で四季折々に訪れる機会に恵まれました。私の二人の子供の遊び場ともなり、その成長の軌跡とともに家族のアルバムを飾ってくれています。裏山の六角堂にもよく登りました。当時は狸もいました。称名寺の浄土庭園にいるといつも心が安らぎますが、そういえば今でも思い出すことがあります。平成21年11月の「寺社を巡る会」の特別バス旅行は栃木の「足利学校」周辺でしたが、史跡樺崎寺跡も訪れました。同じ浄土庭園を持つ中世寺院の遺跡やその佇まいは、称名寺と同じ雰囲気には溢れていました。その時代に生けるものの祈りが聞こえてくるようで、それも称名寺に似ていました。

称名寺本堂での2月の節分会、8月のお施餓鬼の法会は圧巻です。近隣の真言宗系のご住職が参集されます。法会が終わると卒塔婆を貰い受け、墓参です。彼岸やお盆の頃になると称名寺のご住職が読経に来宅され、その折の語らいも楽しみです。大晦日は称名寺の鐘つきに出掛け、甘酒を頂いての年越しが恒例でした。近年

は鐘の保護の理由から中止されたようで残念です。

重文の木造大威徳明王像が発見された時は驚きでした。胎内に納入されていた奥書から運慶の最晩年の作と判明しました。小像にもびっくりしましたが、県立金沢文庫で実物と対面した時の喜びは格別でした。

県立金沢文庫は鎌倉時代の諸相を今日に伝える貴重な文化財を後世に伝えるとともに、その調査研究の成果を展示や講座を通じて公開し、生涯学習の一拠点としての役割も果たしています。私も講座には往復葉書で申し込んで参加

するのが楽しみです。県立金沢文庫は中世史の宝庫です。残念ながら散逸した往時の文献も、金沢文庫の蔵書印で確認され、今尚各地で発見されております。そのプロセスや謎や史実にも悠久のロマンを感じます。

金沢北条氏一族と称名寺、住職、金沢文庫との関連等、私は知らないことばかりです。歴史を学び、歴史に学び、学んだことを現代に活かし、後世へとバトンタッチしていけたら最高です。その原点のひとつが称名寺と県立金沢文庫にあり、その昔、六浦湊を有した金沢の地にあることを改めて誇りに思います。

ペリーが来た金沢の夕べ

～わが祖先との出会い～

佐々木 和彦

＝まえがき＝

金沢の文化遺産は数多くあれど、幕末、ペリーが突如来航し錨をおろした～小柴漁港沖合の地～。こここそ、私にとり最も印象深く、心に残るところである。この地点に辿り着くと、私の四代前（江戸末期）の祖先「佐々木助左衛門」のことが頭に浮かぶのである。

＝ペリーが見た金沢の夕景＝

（開国の夜明けはここから始まった！）

一昨年（H22）7月31日の盛夏、横濱金澤シティガイド協会が主催するこのタイトルのツアーに参加した。平潟湾で釣り船に乗り込み、暮れなずむ海上を八景島の沖合まで行った。説明によると、この地点こそ、幕末に突如来航したペリーの黒船が錨をおろし、幕府に開国を迫った所だとのこと。

海上から眺める光景は、沈みゆく夕日を浴びて、海面が眩いばかりに輝き、見晴るかす彼方

に富士の頂が幾重かの光彩を放っていた。息を呑むばかりの美しさ！ 開国の端緒となったこの地点の、この美しさを150年前のペリーはどのような思いで眺めていたことであろう。

私はこの光景を自分が生まれ育った故郷＝伊豆の下田＝に重ねていた。目の前の海、遠方の島影、背後に迫る山並み。そして太平の眠りを覚ます「開国」という一大事業を課せられた町。

そして同時に、私の脳裏には、私の四代前の祖先、開国騒ぎに揺れていた天保時代の下田に生まれた「佐々木助左衛門」のことが頭を過ったのであった。

＝佐々木助左衛門のこと＝

～百数十年も昔の祖先を私が知る由もなかったが、5年前に田舎からお墓を三浦半島の頂きに移設したことで、この祖先を追いかけることになった～

私がこの金沢の地に移り住んで早23年が経

過する。生まれ育った故郷の 18 年より長くなった。会社をリタイアしてからは年に何回か、すでに空き家となっていた家に行っていたのだが、車を転がしての片道 4~5 時間はきつくなってきた。将来、墓参も覚束なくなることを考慮し、今はやりの「お墓の移転」を思いついた。

しかし、お墓の移転は簡単なことではなかった。お寺さんとの関係もあったが一番の問題はこの田舎の墓地【お寺の外にあった】の名義切り替えが全く行われていないことであった。所・番地から苦労しながら辿ってゆくと「佐々木助左衛門」という人の名義になっていた。この人が間違なく私の祖先（四代前）であることを法務局に説明するために、何回地元を足を運んだことか！この人は天保 4 年（1833 年）の生まれであった。

ペリーの黒船が浦賀に来航したのが嘉永 6 年（1853 年）、二回目が翌年であり、この 2 回目来航時に、横浜で「日米和親条約」が締結されたとのこと。

そして細則協議のため、舞台を下田に移し二か月の協議で「細則」を締結したようである。この時の、助左衛門は 20 歳。蒸気を噴き上げる黒船をおそらく身近に見ていたことであろう。彼は明治 24 年に死亡しているので、将に、歴史の大転換の節目を見ていたわけである。どんな気持ちで黒船を眺め、移ろいゆく時代をどのように過ごしたのであろうか。

そして、彼が残してくれたのが「お墓」であった。

一年がかりでの「お墓移転」も無事に終わった。今は、この三浦半島の頂で祖先は何を見ていることであろうか。大型船が行き交う眼前の海上か、はたまた遠望される自分たちの故郷“伊豆の山並み”であろうか？ 私の胸中には

何か割り切れぬ複雑なものがある。

＝下田と“タウンゼント・ハリス”のこと＝

ペリーが下田に滞在したのはわずか二か月ほど。むしろ下田に大きな影響を与えたのはハリスではないかと思う。彼は安政 3 年 8 月（1856 年）、ペリー帰国の二年後に総領事として下田に来航した。時に 52 歳であった。

安政 4 年 5 月（1857 年）に下田において「日米修好通商条約」が締結され、下田の領事館は閉鎖、東京の元麻布善福寺に公使館が置かれ、初代公使となったようである。下田滞在は一年ほどであったが、この間、町の人たちとの交流を深めたと伝わっている。

日常生活の世話をしたのが、かの「お吉」である。ハリスは生涯独身であったから後世に誤った風説が伝わり、犠牲になった悲劇の女性「唐人お吉」になったとの説もある。

しかし、下田の町にはハリスとの関係を示す名所よりも、ペリー関連の名所旧跡が圧倒的に多いのは何故であろうか。初めて目にしたペリーの巨大な黒船と巨体の異人さんの姿が強烈なインパクトを与えたものであろうか。

「ペリーロード」「ペリーの銅像がある下田公園」「吉田松陰拘禁の跡」「当時の数々のお寺」「港めぐりのサスケハナ号（ペリーの黒船を模して造られた遊覧船・本物の 1/20）」「黒船祭（米軍軍人が軍服姿、日本側も武士姿の当時の正装をして数々の催しが行われる下田最大のイベント）」。ハリス関連は「お吉」にまつわる悲劇的どころばかり（身を投げた「お吉が淵」等）。

一昨年「横浜開港 150 年祭」が華々しく行われた。横浜も下田も新しい時代に果敢に挑戦していった町である。願うことなら「黒船祭り」がこの祭典のひとつとして採用され、日米の正装姿の人たちが、サスケハナ号に乗り込み、こ

の横浜の地まで回航して来て欲しかったものである。

＝最後に＝

私にとって、故郷下田に似通った風景と歴史の幕開けを担ったこの地に暮らすことができ幸せであったと思う。しかし同じ「開国という難問」を背負わされた横浜と下田では150年後の姿はまるで異なる。横浜は大都市に発展した

のに対し下田は年々歳々「過疎化」の趨勢にあるようである。さみしい限りである。

“わ”の会には3年前に参加させて頂いた。この地の歴史を学習させて頂き大変に大きな刺激を受けている。本当に素晴らしい会だと思う。

役員各位のご努力に心から敬意を表したいと思います。

私の選んだ金沢の文化遺産

高橋 好一

委員会からの課題に対して、私は躊躇なく「野口英世ゆかりの細菌検査室」を提案したい。細菌学の分野で、電子顕微鏡が世にない時代に今なお真理である数々の研究実績を挙げ、3度までもノーベル賞最終候補になったことは、当

会諸賢のよく知るところであろうから、敢えて野口の研究活動の諸々をここでご説明はしない。

24才で米国へ渡り、終生米国を中心に南米、欧州に活躍の場を展開し、アフリカを最期の地にした野口に関わる建造物は夫々の地に

数多く現存し、博物館や研修所に今なお活用されているが、肝心の生誕地日本には、福島県猪苗代湖畔の生家(現在、野口英世記念館)と我が金沢・長浜の長浜・野口記念公園横浜市長浜ホールに付置する「旧細菌検査室」が残されているのみである。野口は1876(明治9)年誕生、20



旧細菌検査室(長浜野口記念公園内)

才で上京、1899(明治32)年6月23才の時、北里柴三郎博士の紹介で横浜開港検疫所に検疫医官補として赴任し、着任早々横浜入港の客船の船員からペスト菌を発見。それを評価され同年10月には当時ペスト蔓延で苦しむ中国へ国際予防委員会日本代表の一員として派遣された。

翌年帰国後は北里博士のもとで研究中、訪日中の米国ペンシルバニア大学フレキシナー博士に出会い、1900(明治33)年12月渡米、その後「世界のノグチ」として歩むのである。僅か4ヶ月の長浜赴任ではあったが、必死

に顕微鏡を覗き込みペスト菌を探り出し、意気揚々としている野口の青春が目に見えるようではないか！検査室は関東大震災で倒壊したが資材をそのまま用いて再建したのが現在の建物である。

戦後検査室は遊休化し荒廃、廃却処分決定

が厚生省(当時)でなされたが、横浜の一主婦小暮葉満子氏が検査室保存運動を展開、紆余曲折の結果、保存が成り、1997(平成 9)年長浜・野口記念公園として開園した。以来全国の野口ファンで成る「野口英世細菌検査室保存会」が結成され、野口の活動の調査研究や野口顕彰のための諸活動を進めている。

この意義ある細菌検査室を金沢文化遺産として、金沢区民のみならず横浜市民、神奈川県民そして全国いや世界の野口ファンの聖地とすることを念じて止まない。

2002(平成 14)年当会 5 月度学習講座は『野口英世と金沢』と題し小暮葉満子氏にご講演戴き、翌 6 月には探訪時に検査室のご説明を願った。たまたま私は前年本屋で同氏の著書「今ふたたび野口英世」に出会い一気に読破、ぜひ我が金沢区と野口との関わりをご講演戴こうと御宅を伺いお願いし、講座にこぎつけたものである。

私の郷里は福島県(伊達市)。幼い日々より野口博士の偉大さを父母や先生から聞きつつ育った。西に吾妻連峰がそびえ、連峰の向う側に博士の故郷があると憧憬の念で西空を仰いだこともある。小学生のある日、父母は猪苗代湖畔に野口生家を案内、見学させてくれたことも強く印象に残っている。長じて私は電子工学を専攻し、西澤潤一博士(元東北大学総長。ミスタ一半導體、光通信の父などと呼称)研究室で、学

部・大学院と研鑽したが、当時先生から日夜薫陶を得たことを(恐れ多くも)一言で言えば「愚直」という言葉ではないかと思った。先生は 1985 (昭和 60) 年日経から『愚直一徹—私の履歴書』を上梓されたが、心から納得した次第である。野口英世は、まさに「愚直一徹」の人であった。膨大な実験から得られるデータを細部にわたり解析し、そこから真理を見出そうとする博士の研究法は愚直一徹以外に表現する言葉が見当たらない。ウイルスは精々数 10nm の大きさである。光学顕微鏡の理論最大分解能は 100nm。ウイルスが見える筈が無い。独 Siemens 社が電子顕微鏡を販売開始したのは、野口の死後 10 年、1938 (昭和 13) 年のことである。黄熱病ウイルス(透過性細菌と呼んだ)を発見したという発表は結果的にはミスだった。しかし南米、アフリカにおいて多くの現地人が黄熱病で倒れている現実に直面し、早くワクチンを作り出し助けたいと願った野口の人類愛こそ賞賛されるべきと思う。1928(昭和 3)年 5 月アフリカ・アクラで 51 才の生涯を終える寸前に野口が言った言葉は「どうも私にはわからない」であったという。自分が精魂を傾け作ったワクチンが、この自分に免疫効果が無いのはなぜだろう。彼は最期の時まで悩み悩んだ愚直一徹の人であった。

上行寺東遺跡

山田 務

国道 16 号線と県道六浦原宿線との分岐点付近の丘上に、「上行寺東遺跡」があった。今は遺跡のあった場所の一角に、「上行寺東遺跡復元整備地」として、遺跡上段遺構のレプリカが残っている。金沢の文化遺産として、敢えてこの消失した「上行寺東遺跡」を選びたい。

1. 六浦と六浦津

遺跡のある六浦は、中世では四角四境祭や七瀬祓いの祭場の一つに挙げられ、鎌倉の境界として鎌倉の一部であった。また六浦荘は六浦本郷、釜利谷郷、金沢郷、富岡郷から成り、この地域の中心地でもあった。

六浦津は、鎌倉道—六浦津—東京湾を結び、

利根川、荒川、入間川などの大河川とつながる関東平野や房総半島の領地から年貢輸送船が陸揚げし、鎌倉を支える物流拠点の港湾都市として繁栄した。また「三艘」、「唐猫」、「西湖梅」の伝承から、唐船、琉球船も渡来したといわれる。現在その面影は殆ど残っていないが、大道から瀬戸にかけて廃寺跡も含め多く寺院や、中世墳墓の「やぐら」群が残り宗教的空間を形成しているのが、数少ない証である。

しかし、六浦津、六浦は、土砂の堆積や相次ぐ争乱により衰退し、洲崎、町屋に中心地が移行した。

2. 上行寺東遺跡は浄願寺跡か

上行寺東遺跡が発見された当時、それは龍華寺の前身の一つである浄願寺跡ではないかと大いに注目を浴びた。

龍華寺略縁起によると、①浄願寺は治承年中(1177~82)源頼朝が伊豆の三島明神を瀬戸に勧請し、文覚と共に六浦の山中に伽藍を建立し別当寺とし、②本尊に弥勒菩薩を安置し、四方に四十八の子院を、荘園と靈宝を寄進、③その後正嘉年中(1257~59)に忍性が止住し律院としたと伝える。

また浄願寺の所在は、「山高からずといへども、奇岩靈窟あり、或いは壇場をかまへ、或いは梵字五輪の塔を彫刻せり」と伝えられ、上行寺東遺跡の景観に酷似していた。

更に筑波法雲寺涅槃図の軸木銘縁由によると、①この涅槃図は文和3年(1354)六浦庄蔵福寺で、絵師沢間長祐、勸進聖浄願坊円慶によって作られ、②嘉吉4年(1444)蔵福寺から浄願寺に改称、③永正4年(1507)兵火により浄願寺は焼失したため、龍華寺にこの図が移されたと伝える。



上行寺東遺跡

3. 上行寺東遺跡保存運動

上行寺東遺跡の一部は、京急電車の車窓からもかって見る事が出来た、六浦ガードやぐら群の丘上に位置する。昭和59年(1984)、このかつての六浦津を見下ろす丘上に、地上6階建て、敷地面積約6,000 m²のマンション建設計画が持ち上がった。建設に先立ち、玉川文化財研究所による発掘調査が始まった。

その結果、上中下3段に分かれる遺構から、やぐら44基、建物址10棟、池址1基、井戸址3

基、土坑墓と火葬墓の計19基、切り通し道址1基及び多数の五輪塔、板碑、人骨、宋銭、陶磁器等が発見され、忽然と遺跡の全体像が出現した。

この中で特に注目されたのは、上段遺構である。先ず胸上の欠落

した阿弥陀像で、衣の下で印を結ぶ密印のレリーフが岩盤に刻まれており、蓮弁の形から鎌倉時代の作と考えられた。この阿弥陀仏に向かい手を合わせると、西方浄土の方向に夕日が沈む、荘厳な作りであった。またこの阿弥陀仏に対応するように、その前面に念仏堂と思われる三間四方の建物址が発見され、さらにこの建物に付随し、州浜や中の島を持つ池が掘られ、浄土式庭園と考えられた。

その他に、中段遺構のやぐらから、永徳3年(1383)銘、「頼源大徳」の法名が刻まれた五輪塔などが発見された。

このように他に類型のない貴重な遺跡であることが次々と明らかになったため、歴史研究者を中心に広範な遺跡保存運動が展開された。しかし横浜市および開発業者はそれらの声に耳を傾けず、さらに遺跡について時間をかけ十分な検証を行うことなく、昭和61年(1986)に

全面破壊された。現在残るのは、保存とは名ばかりの「造形保存」とされるレプリカと、「記録保存」とされる 16 年後に発行された発掘調査報告書のみである。ただこの遺跡発見を契機に、①多くの六浦の歴史論文が研究者により発表されたこと、②「横浜市文化財保護条例」が直後(昭和 62 年)に制定されたこと、③この遺跡に連なる「御伊勢山・権現山の樹叢」が市天然記念物

に指定されたことが、せめてもの救いである。いま問題のマンションのベランダを背景に、この余りにも不自然な復元整備地に立つ時、文化財保存の難しさを痛感し、深い虚脱感に陥るのを禁じえない。またこの場合は、称名寺裏山保存運動の成功例があるにもかかわらず、無関心のまま遺跡破壊の暴挙を許した地域住民の反省の場でもある。

[主参考資料]

- 1)金沢生涯学習“わ”の会編、「新版かねざわの歴史事典」(2010)
- 2)神奈川県立金沢文庫編、展示図録「中世の港湾都市六浦」(2009)、「龍華寺—武州金沢の秘められた古刹」(2000)、
- 3)神奈川地域史研究会編、「神奈川地域史研究」第 3・4 合併号(1986)、第 26 号(2008)
- 4)上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団編、「上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書」(2002)

私の生涯学習

私の生涯学習

飯富 禧子

生涯学習というものが一つのテーマを追い続けることであるとするなら、私の聖書の学びもこの範疇に入るのかも知れないと思い、一文をしたためることにした。

私の聖書の学びは一枚の絵に触発されて始まった。昭和 61 年の年の瀬、美大卒の親友から「エル・グレコ展が凄い。」と聞かされた私は、名前すら知らなかったエル・グレコの絵をぜひ観てみたいと思った。しかし折悪しく当時 3 歳の娘が風邪を引き、美術館どころか外出すら思うに任せない日々が続いてしまった。東京展の会期の終了が迫ったので、地方展がないか調べてみた。すると年明けに奈良の国立博物館で巡回展が開催されることが分かった。

翌年の 2 月、防寒着に身を固め、親子 3 人奈良へ出かけた。小雪がちらつく日だった。国立博物館の会場は閑散としていて、鑑賞者が居な

い貸切り状態であった。私達親子は思い思いのペースでグレコの絵を観て廻った。娘もとつと一人で観て歩いていた。エル・グレコの絵の不思議な色彩に目を奪われていた私の耳に突然、「きれい！」という娘の声が聞こえてきた。3 歳の娘が絵を観て感動の言葉を発したことに私は驚き、娘が観ていた絵の前に急いで行ってみた。その絵を観た瞬間、私の胸に熱いものがこみ上げてきた。娘の言葉に触発された訳ではない。私の心の奥が震えたのだ。それは単純な感動とは別種の不思議な感覚だった。絵の題名は「改悛するマグダラのマリア」だった。グレコの絵の中のマリアは実に清らかだった。グレコ特有のブルーグレイの背景の中で、大きな目を一杯に見開いて天上を仰ぎ見ている。それまでの私の知識では「マグダラのマリア」は「罪の女」だった。それなのに私は「罪の女」の姿に心が震えたのだ。絵の中のマリアは何を改悛

しているのか。そして誰に向かって改悛しているのか。私の心の奥が震えたのは何なのか？「改悛するマグダラのマリア」の絵から様々な思いが浮かび上がってきた。この混沌とした思いが、私を聖書の学びへと導いた。

その日以降、私は自分自身がそれまで抱いていたマグダラのマリアが罪の女であるという概念の真偽を探ろうと考えた。手始めに新約聖書のマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四福音書中にマグダラのマリアの名を捜すことにした。彼女の名前が明確に記述されている場面は幾つかあったが、その中で罪の女という私の記憶に符合する記述が『マルコによる福音書』と『ルカによる福音書』にあった。『マルコによる福音書』には「マリアは以前七つの悪霊を追い出してもらった婦人である。」とあり、『ルカ』には「悪霊や病気から救われた数名の婦人たち、すなわち七つの悪魔を追い出してもらったマグダラのマリア」と記述されていた。悪霊・悪魔という記述が罪の女との同一視を招いたのだろうか。真偽を確かめる手掛かりが掴めたような気がした。

四福音書のマグダラのマリアに関する記述には違いが認められるが、イエスが一人の女から香油を注がれる場面での違いは特に大きい。『ヨハネによる福音書』にはユダの裏切りによりイエスの受難が確実にされた時の場面として、「イエスはベタニアに行かれた。そのベタニアで人々はイエスを食事でもてなした。そのとき、マリアは非常に高価な純粋のナルドの香油を、1リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪の毛でその足を拭いた。」と記述されている。『マタイによる福音書』と『マルコによる福音書』にも同じ場面が描かれているが、香油を注いだ女の名は記されておらず、香油を注いだのも足ではなく頭になっている。又、『マルコ』では「勿体無いことをする。」と怒る弟子に、イエスが「この婦人は出来るかぎりのことをしたのだ。埋葬にそなえて、あらかじめ私の体に油を注いだのである。あなたたちによく言うておく。世界中どこでも、福音の宣べ伝え

られる所では、この婦人のしたこともまた、その記念として語られるであろう。」と言われたところで物語が終っている。イエスに香油を注ぐという、弟子達が思いも付かない行為をしたマグダラのマリアは、イエスに対する信仰と崇敬の念が篤い女性として描かれたと言える。

一方、女がイエスに香油を注ぐ同じ物語が『ルカ』では場面の始まり方も終わり方も大きく異なっている。物語は一人の罪の女の登場から始まる。イエスがファリサイ派の人の家で食卓についておられる時、その町に住む一人の罪深い女が香油の入った小壘を持って入ってくる。そして、泣きながらイエスの足を濡らし、自分の髪の毛で拭き、その足に接吻をして香油を塗る。この場面を見たファリサイ派の人は心の中で「あれは罪深い女なんだ。」とつぶやく。ファリサイ派の人の心の中を見抜かれたイエスは、許しと愛について譬え話を語る。そして「あなたの罪は許されている。」と女に呼び掛ける。席を同じくしていた人々は、「罪を許すこの人は、いったい何者だろう。」と心の中で呟く。イエスは最後にその女に「あなたの信仰があなたを救ったのだ。」と語り掛ける。この場面での女に名はない。名が無いが故にこの女が『ヨハネによる福音書』のマグダラのマリアと同一視された可能性は大きい。“なぜ、マグダラのマリアは罪の女といわれるようになったのか。”私の心を震わせた「罪の女」の真実に近づきたいという思いはいよいよ強くなった。「罪の女」の真実に自分が納得できる回答を得ようと、それから聖書を読み、様々な著作物を読み漁った結果、『ヨハネ』と『ルカ』の女は同一人物ではなく、混同されたのではないかと考えるに至り、疑問への回答に一步近づいた気がした。しかし、紀元一世紀後半に書かれた聖書の中に、マグダラのマリアの真実を見出すことは出来なかった。

私が疑問を抱いてから10年後、マグダラのマリアに関する一冊の本が出版された。ジャクリーヌ・クランというフランスの女性の手になる『マグダラのマリア 無限の愛』という小説

だった。その本の末尾に日本の聖書学者である荒井献による付論が載っていた。その中の一節を目にして、私はやっと得心した。「マグダラのマリアが罪の女と同一視されたのは、一般的には四一五世紀頃、しかも西方教会（後世のローマ・カトリック教会）において、といわれる。通説によれば、アウグスティヌスが最初の責任者であり、グレゴリウス大教皇においてそれは定着する。」と。マグダラのマリアは、カトリック教会の高位の聖職者によって罪の女とされたのだった。歴史の経緯の中で作られた罪の女が、グレコの絵の中では改悛する罪の女として描かれたことになる。しかし、グレコの筆は、罪の女としてではなく、意図せずに無辜の女の姿を描いてしまったのではないのか？私が 25 年前にグレコの絵から鮮烈な印象を受けたのは、将にそのためだったのではないかと思った。この様に考えるのは穿ち過ぎだろうか。

「罪の女」の真実を求めて様々な著作物を読む過程で、私に新たな問い掛けが生まれた。フアリサイ派の人が発した「罪を許すこの人は、いったい何者だろう。」という言葉が、そのまま私自身への問い掛けを生んだのだった。「何者」という問いは、イエスという存在そのもの

を問う問題であり、信仰と深く結びついている。また、突き詰めて考えると、私という存在をも問う問題なのではないのかと思った。しかし、クリスチャンではない私は必然的に信仰を抜きにして考えざるを得ず、探り得ない深さを感じさせられた。

平成 15 年の暮れ、私は会社勤めの定年を迎えた。翌年、私はカトリック教会の神父が開講しているカルチャーセンターの聖書講座に参加し、新たな気持ちで聖書を学び初めた。講座は『ヨハネによる福音書』であり、既に 2 年前から開講されていた。私が受講を開始した時点で、講義は第六章の半ばまで進んでいた。その時から月に一度の受講で、7 年が経過した。講義の資料は 1250 ページを超えた。私は何を得ようと聖書を学んでいるのか。今改めて自分に問うてみる。「罪を許すこの人は、いったい何者だろう。」という言葉の解明が、やはり私の新たな学びの目標となっていることは間違いない。この問いに答えというものは無いのかも知れない。ただ、イエスに関わる何かが心に落ちる一瞬を待っているのかも知れない。

編集注：エル・グレコの画像 URL

http://livedoor.blogimg.jp/mozart_no2005/imgs/9/c/9c2f451c.jpg

古文書抹殺、無念至極に御座候

井上 雄二

学生時代にやりそこなった漢文などの多少の習得と、また多少のボケ防止を期待して定年退職後、横浜市大の科目別履修生となった。科目は受講者の選択であり通常一年間、現役学生諸氏と机をならべる。教授によっては毎週出欠をとる先生もおり、当然に期末・学年末試験・レポート提出等全く一般学生扱いで、試験結果

や、年間の「優良可」の評価、単位の取得が通知される。

私は、毎年 1 科目受講と決めていたが、ある年、県公文書館の「古文書初級講座」に参加し「これはイケる」とあっさり思い込み、翌年、市大の「古文書学」講座を受講することになった。新学期はスタートしたがなにしろ初級講座で入り口の一部をかじっただけの知識だから、

江戸期の講義資料の解説はチンプンカンプンであった。有難いことに、そこに救世主がおられた。その教室に現“わ”の会「古文書を読む会」の真田先生が先輩として籍を置かれていたのだ。真田先生は履修生といっても、すでに完璧な読解力、また豊富な歴史知識をもっておられ、時々担当講師が資料の解説に真田先生の意見を求める場面もあった。先生は私の苦渋をみて哀れとおもわれたのだろう、当日の講義一時間前に差しで予定資料の解説を引き受けられ、おかげで以後の私は虎の巻をもった案配で、他の学生諸氏が四苦八苦している様子を横目に、余裕しゃくしゃく授業に出席することができた。講座も予定の一年が終わりに近づいた頃、既に入会されていた真田先生より“わ”の会「古文書を読む会」を紹介・誘われ、今に至っている。蛇足ながら、成績は無論「優」であった。その当時、市大は改革・リストラの気運が高まり、外国人を学長に据えたり、3学部を1学部にまとめたり、それを嫌って文系の有名教授が早々と逃げ出したり？、傍目ながら学内が騒然としている雰囲気を感じられた。改革・リストラのキーワードは「実学重視」とのことで文系講座の廃止などが取沙汰され、私の受講する

「古文書学」もその対象として俎上にのぼっているようであった。今回この稿を書くにあたって、横浜市大で「古文書学」講座のその後を知りたいと23年度版講座概略を調べたが、何度もくりかえし眼をこらして探しても、ついに「古文書学」の文字は見出せなかった。講座は抹殺されたのだ。

市大改革の音頭をとったのは、「開国博Y150」を立ち上げ、大詰めで大赤字必至などもあり任期をまたずに辞職した市長であった。

今、「古文書を読む会」で、真田先生は開港資料館・歴史博物館・金沢区の旧家古文書等、広範に調査され、江戸期の歴史を振り返えさせる興味深い資料を毎回用意される。江戸時代人のものの見方、考え方、生活思想など、当たり前のことながら現代の私たちに種々の場面へつながり流れ込んでいるのが理解できる。赤字財政の市の下で、市立大学が市民税の補助を受け「古文書学」講座を持つことの良否は、議論のあるところだろうが、このような江戸と現代をつなぐ背景をもつ日本歴史の一部としての講座が簡単にないがしろにされて抹殺され、私には歴史があっさり断ち切られる思いがし、淋しいかぎりである。

私の古文書のめりこみのきっかけ

真田 雅行

サラリーマン退職後の余暇の過ごし方として前から興味のある歴史をもう少し突っ込んで見よう、その場合何か特色のあるものと考え、二年間の一人生活を覚悟して大学で日本史を聴講しながら、京都・奈良・滋賀の各地を自転車と車で片っ端から巡った。その過程で本当に歴史を知るには直接古文書や古蹟の文字を読めることが不可欠と悟ったので、横浜に戻り横浜市大で週一回の古文書講座を四年間受講した。先生から古文書はただ出席するだけの安易な取組方では上達しない、や

る以上は興味を持って、我慢強く、継続し、予習と復習を必ずすること、慣れること、を叩き込まれた。手前みそだが、比較的真面目に通ったことが良かったのであろう。

最初ほとんど読めなかったものが四年後には一通り読めるようになった。卒業後これを継続しようと紹介をいただいて“わ”の会の「古文書を読む会」に入れてもらったが、即講師にさせられるとは全く想定外だった。あれから約八年になろうとしているが、特に最初の数年は教材集めに四苦八苦の連続だっ

た。我々の先祖は明治以前の人なら古文書を十分に読めたのに、古文書を戦後は教えないこともあって現在の学校の先生も知らないの

が一般的である。ある意味では日本人の心でもある古文書を学校で教えてもらいたい、と思う最近である。

ライフワーク

深澤 勝美

歴史の町金澤六浦に住んで五十年、鎌倉時代の歴史が多く残っている地である。

相模の国と武蔵の国の国境にある鼻欠け地蔵、朝比奈の切通し、和田の谷戸、宝樹院の阿弥陀堂、そこに関所があった等々その歴史をもっと知りたくて“わ”の会に入り十年余が過ぎた。

“わ”の会には優れた特技を持った人がいる。その人達が講師となり幾つかの分科会をもっている。その中の一つに「パソコンを使いこなす会」がある。

「パソコンを使いこなす会」に入るには一抹の不安もあったが、もう一つの私の生き甲斐である「六浦 あげぼの」の献立のお品書きを作るためパソコンを使っていたので、もう少し勉強してみようかなと思い仲間に入れていただくことにした。あれから三年、少し上達したかな、いやいや難しくて難しくて……。

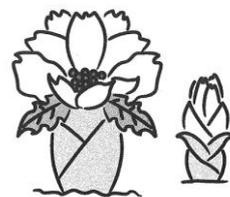
なにが弱点かという、用語が覚えられないことである。言葉がわからないからとパソコン用語集を開くとその項目の中にまたわからない言葉が出てくるのでそれをまた調べるといのように、一つの文の中に二つ三つとわからない言葉が出てくるとお手上げである。先生に聞けばよいが質問の仕方がわからない。歳と共に記憶力が衰え、持続力がない事がよくわかる。

またパソコンの奥の深さを知る。だから面白味もあるのだと思う。またわかった時の喜びも一入である。

もう一つの私の生き甲斐は「六浦 あげぼの」である。今から十八年前、金沢保健所主催の「家庭介護教室」に参加してその保健所の支援のもとに立ち上げたデイサービスと配食サービスの会である。会を立ち上げたものの、会場なし、資金なし、経験なしのナイナイづくしだったが、会場は大道小のコミュニティが使えることになった。会場の都合がつかない時は、皆でおにぎりを持って公園散歩に出かけることもあった。その後、市のふれあい助成金や区の社会福祉協議会の赤い羽根助成金を受けることができ少しずつ軌道にのってきた。私たちの活動が認められたということでしょう。会場も新しくオープンした六浦地域ケアプラザに落ち着くことができた。

“わ”の会同様「六浦 あげぼの」にもピアノを弾く人、声楽が得意の人、手芸や料理の上手な人、元看護師さん等特技もった人も多くデイサービスを盛り上げてくれる。

年々歳を重ねて老境に入るは仕方がないがそれに逆らわず、前向きに日々感謝してこれをライフワークとして生活して行こうと思っている。



私の生涯学習

宮原 宏至

生涯学習について記すことになり、はじめて「生涯学習」と言う言葉をインターネットで調べてみました。

『生涯学習とは、人が生涯にわたり学び・学習の活動を続けていくこと。日本においては、人々が自己の充実・啓発や生活の向上のために、自発的意思に基づいて行うことを基本とし、必要に応じて自己に適した手段・方法を自ら選んで生涯を通じて行う学習だという定義(昭和56年の中央教育審議会答申「生涯教育について」より)が広く用いられている。』

このように定義されていますが、私が「生涯学習」という言葉を意識したのは定年退職後でした。それまでは無関心でした。

今から振り返ってみますと、自由な時間ができるのでこれからは自分の好きなことをしようと思い、まず区・市・県の広報を眺めてみたら、いろいろと面白そうな講座・探訪・サークル紹介がされていました。これらに参加しますと更に関連する企画が続々と紹介されてきます。1年後には講座・探訪等が年間500回位になりました。午前・午後・夜間に区切られているものや1日かかるものもありますので、休みが殆んどない状態でした。

確か最初に参加したのが“わ”の会だったと思います。この後、近隣他区の広報などで見つけて申込み、今でも継続している会は西区・南

区・港南区などの会があります。

“わ”の会以外の会では、山登り・歴史探訪・古典講座・企業見学・大学の公開講座等があります。参加すると今まで知らなかったことを知る・体験することにより感動があります。感動のないイベントには参加の意義がないと思っています。私は山登りや探訪が多いこともあり、1日平均15,000歩位歩いています。歩くことにより、今まで気が付かなかった事が見えてきます。

参加に際して、次の3面が大事と思います。

- 1) 自ら参加する。他の人に誘われていやいや参加では長続きしない。
- 2) 参加したら他の人と積極的に交わる。会後のお茶会・飲み会も有意義。
- 3) 会の運営等のお手伝いをする。ただぶら下がっているだけでは分からないことも運営に参加することにより見えてくる。当然ある程度の責任・リスクはあるが、たまには必要。皆さんから感謝される喜びは苦勞に勝る。又、山登り等の計画書作りは認知症防止に効果大とのこと。

私はこの10年余りを振り返ってみますと、生涯で最も楽しい期間であったように思います。これからもささやかなチャレンジを続けて行きたいと思っています。

私の生涯学習

山本 千鶴子

この地(横浜市金沢区)に魅せられた中で印象深いのは称名寺や伊藤博文別邸等枚挙に暇が無いが、一つだけ取り出すとなればやはり私は朝比奈切通しを挙げたい。

私は母校兼勤務先の大学所在地が東京だっ

た事で、この関東圏での生活もそれなりに体験はしていたものの、数えるほどしか横浜まで足を運んではいなかった。

今から7年前、息子たちの新居にとこの金沢区に新築されたマンションを購入する運びと

なったものの、息子の勤務地移動等によりマンションの維持・管理を私がしなければならない羽目となり、徐々に私の生活の本拠が金沢区になっていった。

金沢区の街の雰囲気魅力的だったのか、息子たちが作り上げてくれたマンションでの交流が楽しかったのか、数え上げれば更に多くの横浜に根を下ろす要因があったと思うが、私が横浜市民としての自覚を持たされた大きな体験＝横浜市代表の選手団の一員として、ねんりんピック大会へ出場＝が決定的だったかもしれない。

それは兎も角として、孫たちと最初に朝比奈切通しを通過して鎌倉へ抜けた時には仰天した。地理にも歴史にも疎い私だったので、このように江戸時代から時を隔てて現代に至るまでそのままの切通しが残存している事にも驚いたが、鎌倉へと幼児も歩いて行く事が出来た事で二度吃驚した事であった。

この体験が引き金となり、金沢区に住むようになったからには横浜の歴史・名所旧跡・地理的把握・・・等をと、金沢区地域振興会が主催する「横浜金沢を歩いて知る研修」に参加もし、3年ほど前から「金沢区生涯学習“わ”の会」に入会させていただき研修努力を積んできたものの、地理的感覚も無く歴史にも精通してい

ない私は、少しでも知識が増える楽しみはあっても地名・人名共に知ったと思う途端に忘却のスピードも速く、学習会での貴重な講話も何%が私の頭脳に記憶されているのかなど覚束なく思うが、それでも博識の会員さんたちに囲まれ「かねざわの歴史事典」を紐解いていると、蓄積されていく知識の量が多少なりとも増えていくようで楽しい。

これまでの我が人生で出来なかった事が齢を重ねた今も尚、新たに出来るようになり上達していくのは嬉しい事で、囲碁も写真も社交ダンスもパソコンも・・・とその殆んどは還暦を過ぎてからの手習いに等しく、とりわけ写真は横浜の歴史や名所旧跡把握にも大きく役立ち、写真展の作品作りとは違った角度でシャッターを切っている。

分科会の「懐かしの映画を観る会」にも参加させていただいたりしているが、私の場合は映画とは無縁に近い人生だったので、懐かしというよりは初めて観る映画に感動する機会が与えられ、淀川長治ならぬ佐藤さんを筆頭とする多くの人たちに出会えた交流も有り難く感謝に堪えない。

そのような次第で、今後も“わ”の会の一員として研鑽を積み重ねて戴きたいと願っていますので宜しくお願いします。

自由テーマ

“わ”の会の思い出と雑感 池谷 春夫

“わ”の会に仲間入りしてから、早くも9年目です。分科会も含め毎月3日程もの、有意義な時間を過ごしております。この間に、現役時代と違った、多くの友人を得ました。それも、10～20歳上の大先輩もかなりおります。現役時

代には色々ご活躍された先輩方だけに、多くのことを学ばせて頂いております。

金沢区のみならず、鎌倉・三浦半島・湘南など隣接地域までの、歴史の数々を見聞出来ました。つくづく思います、こんな素晴らしい金沢

の街に、生活している「幸せ」を改めて思い知った気持ちです。「懐かしの映画を観る会」では、少年時代から青春時代に感動・感激を得て、何らかの影響を受けたような名画の数々を、この歳になり鑑賞出来て、心だけでも、昔に戻った思いで、大いに元気を頂いたり、当時の風景や生活感など、最近との違いなど知って、大変に驚いております。

また、手帳を見ると、現役時代より賑やかな生活を過ごしている幸せを感じております。ボランティアの手伝いを幾つかさせて頂いて、その間に蕎麦打ちの会、さらに月2回の「うたごえ」で童謡・唱歌・昔の歌など思いっきり歌って元気を貰っております。また、大学の特別講座や医療講座にも参加して後学の為にと……。

コンサートや小旅行も時々楽しんでおりますが、これらは、自分自身の健康が有ったのことに、思っております。健康維持のための毎朝の60分ほどの散歩と東京湾を眺めてのストレッチングは、10年近く継続できて大いに効果ありでしょうか。私は、足・腰の痛みが20年余も有り、その自主リハビリとして前述の散歩と銭湯や偶にSpaなどに行き、悪化を防いでおりますが、効果が大きいと思っています。

と、言うことで“わ”の会を中心に色々と参加することで心身の元気を頂きながら、シニア時代の日々を愉しく過ごすことが出来ております。

有難うございました。これからもよろしくお願いたします。

社会教育会館の思い出

小岩 克介

今から50年以上も前の話である。現在の県立金沢文庫のある敷地に「昭和塾」が昭和5年開設され、戦後「神奈川県立社会教育会館」となった建物があった。「金沢文庫」はトンネル（当時は素掘りの洞窟状で立入禁止）の称名寺側、阿字ヶ池の西側の高台にあった。

その社会教育会館で青雲の志に燃えた新入社員の教育研修が毎年続けられていた。

期間は3週間程度。朝、応援歌がスピーカーから流れると共に起き、集合、体操の後、ランニングを行った。眠い目を擦りながら、朝日を浴びて掛け走り廻った。柴の漁港の周りや、小柴のトンネルをくぐって走り回った。柴の漁港はしゃこの匂いがしていた。

朝食の後、講義が開始され、会社の組織や仕事の内容の講話を部課長や係長、担当者から受講した。新入生は120人くらいで、グループの会社の人も一緒であった。夜は10人ぐらいつに別れ、ミーティングがあった。風呂は一度には入りきれず、別れて入浴した。近くの銭湯「日

の出湯」に通ったこともありました。この浴場は現在無い。

称名寺の裏山、赤門、参道、仁王門、金堂、庭園、阿字ヶ池、釈迦堂、鐘楼、美女石等懐かしい思い出である。当時はそれらに知識もなかったが、それぞれは今も脈々と歴史が続いている。

3週間後に配属先が決まり、事務屋さんとはそこで別れ、技術屋はさらに4週間の技術教育を研究所で受講した。以上が、私の金沢での新入社員時代の懐かしい思い出である。今となつては、教育内容は別として、そこでいろいろな人と知り合いになり、その後の人生にそれがどれほど役になったか測り知れません。

現在の金沢文庫の前の公園に、現在「あずまや」として移設された社会教育会館の玄関飾りがあります。とても懐かしい思い出である。

視点・金沢区の駅名から

堀井 克子

金沢区には金沢八景、金沢文庫、富岡と谷津坂から名前が変わった能見台駅の四つの駅がある。

- ◎ 八景の名所を残す江戸版画
- ◎ 文庫にも展示憩いの場を構え
- ◎ 谷津坂も人呼び寄せて能見台
- ◎ 海風を遠く富岡祇園船
- ◎ 金澤の駅名（な）それぞれ歴史積み

金沢区に住んで郷土の歴史を探る手始めは、この四つの駅をホットポイントとして歩くことも、興味を膨らますことが出来るのではと思う。

一つの例で、金沢八景駅ホームで“不思議発見”。駅には名所案内板が建てられているが、その名所案内板は新しく、樹の幹を模したコンクリート製で案内表示も新しい内容となり、かつての白ペンキ板に墨黒々と書かれたものとは趣が異なる。新しい内容は特に問題ではないが、金沢八景の案内が最後の片隅に小さく書かれている。八つの風光明媚な景色は過去のもので、見ることが出来ない現実を案内板は示している。

州崎晴嵐、瀬戸秋月、小泉夜雨、乙艦帰帆、平瀉落雁、野島夕照、内川暮雪、称名晚鐘と詩や絵画にも残された観光名所が小さく駅の案内板で伝えられてどれだけの人が注目し、語り継いでくれるか試されているようである。

明治以後の文明開化、戦争等々めまぐるしく

時代が動く現代、変化は当然であるが、それを踏まえて、足元から学ぶ歴史は今をよりよく生きる糧となる。

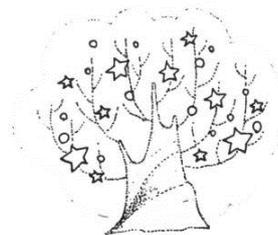
“わ”の会で学習会、講座、探訪、又、古文書を読む会等で金沢区の歴史を学び、郷土への理解を深めているつもりでいるが知れば知るほどその奥の深さを思い知らされる。

本年、古文書の会で「金澤道」を歩き、その道の時代での役割等、残された道を辿りながら確認する実地踏査を行った。江戸の昔、旅人が行き交った金澤道は舗装され道幅も広くなり車の往来も多く、案内の道標や石塔等を探すのに地図だけでなく、聞き込みにも手間取り、この道の名を知らない人にも出会う。

- ◎ 海山の景色は過去を語らない
- ◎ 金澤道名所の丘も雑木伸び
- ◎ 家並みに野の道舗装町化粧

郷土の歴史を紐解く入り口は無数あり、日常の生活環境からも手繰り寄せることが出来る。駅名や地名、行事等々読み取る楽しみがある。

- ◎ 「信心と別」とは言わず初詣
- ◎ 駅前にはマンションそれは茶屋の跡



分科会代表との連絡会議報告

各分科会代表と運営委員および顧問が参加して、平成 23 年 12 月 17 日(土)に「第 7 回 分科会代表との連絡会議」が開催された。その内容を報告する。

1. 代表挨拶 ……小俣代表

「寺社を巡る会」では創設 10 周年記念講演会が実施され、「古文書を読む会」も来年 5 月の学習会での記念講演に向けて準備中。「ふれあいの道を歩こう会」も検討を始めた。各分科会での推進をお願いします。

平成 24 年度の継続会員数は 110 名で、90%強が継続。学習会の出席率は昨年度比約 2%減であるが、70%を確保で、会の勢いは継続。

2. 各分科会の状況紹介（今年度の活動状況と来年度の活動予定）…席順で発言

①「古文書を読む会」 ……岡田代表

来年 1 月から代表が真田氏に交代。今年度の活動は計画通り順調に進行。

②「懐かしの映画を見る会」

……佐藤代表

4～9 月と 10～3 月の 2 期に分けて活動。会員は男 49、女 22、合計 71 名。題名リストを配って希望を集計し、来年度の上映計画を作成。毎月第 2、4 月曜日を定例としている。会報は年 2 回発行としていたが、原稿が集まらず、1 回の発行もままならなくなって来た。

③「寺社を巡る会」 ……松本代表

今年度は「東海道の宿」をテーマに各宿の寺社を巡っている。会員は 50 名。実質参加は 45 名程度。来年度は周辺地域（磯子、港南、他）の寺社を訪ねる予定で、1 月末には計画を纏める。

④「パソコンを使いこなす会」

……林代表

会員数 22 名、出席率 85%程度。通常使っていないスキル、習ったが忘れかけたスキルを使えるように講習内容を計画している。来年度は、WORD 基本操作の復習に注力したい。

⑤「浮雲俳句会」 ……北野代表

今年度は「鳥」をテーマに活動。来年度は「山岳」をテーマにする。毎回「天、地、人」の秀句を選出。それらをまとめて句集にする等、10 周年記念は考えている。

⑥「ふれあいの道歩こう会」

……宮原代表

今年度は震災のために中止が増えた。会員は 26 名。毎回の参加は 13～20 名。平成 25 年 1 月で予定コースは終了する。その後は「ふれあいの道」の一部をアンコールコースとして歩くことを計画。

3. 分科会 10 周年記念事業

①「寺社を巡る会」実施報告

……松本代表

記念講演会を開催。68 名が参加で、分科会会員が 41 名、その他が 27 名。探訪資料 10 年分をパソコンに取り込み、DVD に焼いて会員に配布の予定。

②「古文書を読む会」の準備

……岡田代表・真田新代表

金沢道を実際に歩いて路傍の道標などを調

べ、関連の古文書を探し、読み解いた。また、分科会全員に感想文を依頼。それらを冊子にまとめて配布する予定。5月の学習会で金沢道の講演を行う。

③他の分科会の構想並びに準備

「ふれあいの道歩こう会」は再来年が10周年。『ふれあい記録第3集』の発行と記念ハイキングを予定。「浮雲俳句会」はまだ5年位先なので具体案はない。「パソコンを使いこなす会」はまだ先の話と考えている。「懐かしの映画を見る会」は平成26年が10周年になるが、問題意識を持って検討中。

4. 各分科会へのお願い

①フォーラム KANAZAWA の展示について
.....相川委員（フォーラム担当）

運営委員会の展示案に対して分科会代表から、「従来通りの展示では、他の団体に比べて派手さがなく、“わ”の会は素通りされてしまう。説明文は面倒で読まれない。」の意見がでた。これらの意見を踏まえ、運営委員会で再検討する。

②会報発行10周年記念号(第40号)について

.....大門委員（会報編集委員長）

来年2月の40号で満10年になるが、表紙を検討したり、記念原稿を募ったり、分科会代表の皆様方の協力を得ながら進めている。

③ホームページの活用について

.....金間副代表（ホームページ委員長）

分科会の活動結果や成果の公開にホームページをうまく利用いただいている分科会がいくつかある。それを参考にするなど、各分科会での利用拡大をお願いしたい。

5. “わ”の会の運営に関する事項

①来年度の学習会について

.....今井委員（学習会企画担当）

来年6月の100回記念講座は永村・金沢文庫長に講師を依頼。会員の出席率が高くなる見込みなのでビジターの参加は特例的に無しとする。

②学習会100回記念について

.....今井委員（学習会企画担当）

記念講座の他に、100回までの講座資料を合本として保存し、会員の閲覧を可能とする。また、会員と主要講師に記念品を贈る。

③15周年記念事業への準備

.....小俣代表

再来年は“わ”の会15周年。年度が変われば、どのような取り組みを行うかの検討を開始。

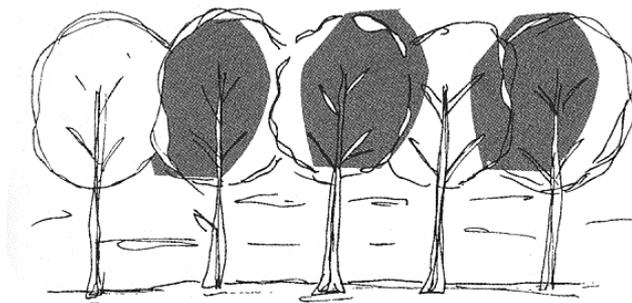
6. その他

○新著書「俳句読本」について

.....北野代表

新作自著の紹介あった。会としては、2月の会報で紹介し、販売の斡旋を行う。

以上



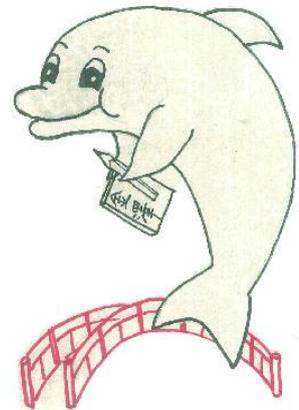
フォーラム KANAZAWA のご案内

毎年3月開催の「フォーラム KANAZAWA」が近づきました。今年は3月10日(土)です。生涯学習に携わっている「生涯学習団体」や「街の先生」が出展し、活動状況を金沢区民に紹介するとともに、活動への参加を呼び掛け、区民との交流、出展団体(個人)同士の交流をはかることを目的としています。

“わ”の会は第1回から出展参加するとともに、フォーラム全体の企画・運営にも関わっています。

昨年は大震災の直後で来場者が少なく寂しい状況でした。今年は是非共、多数の方々にご来場いただき、にぎわしていただきたくお願い申し上げます。

日時：2012年3月10日(土) 10時～16時
場所：能見台地区センター 全館
内容：展示、体験、演技、演奏、野外観察、手打そば試食など
出展数：約45団体・個人
参加費：無料(一部実費負担あり)



*詳細は「フォーラム KANAZAWA」のパンフレットまたは区役所のホームページ
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kanazawa/chishin/shogaku/10-12.html>
をご覧ください。

フォーラム KANAZAWA
イメージ・キャラクター
“ぶんこのイルぷん”

継続会員の状況と新会員募集

継続会員募集の結果

2012年度への継続は110名、非継続は12名、継続率は90.1%となりました。昨年度は92.6%と毎年高い継続率が続いています。会員の皆様方が“わ”の会へ愛着心を持って参加されている結果であると思います。

新規会員募集

2月中旬から各地区センターなどにチラシを配置、ホームページに掲載することで募集を

開始します。また、3月10日の「フォーラム KANAZAWA」の会場でも募集を行います。募集人数は、学習会で利用する地区センターなどの定員の都合で、総会員数は120名とせざるをえないことから、10名と考えております。締切りは3月末です。

継続会員が多いことからくる平均年齢の上昇と女性会員が少ないことを勘案、若い方と女性会員の増加を期待しています。

“わ”の会用ノートパソコン購入

昨年 11 月の学習会で提案・ご承認を頂きましたノートパソコンが入荷しました。画面は通常に入手できるノートパソコンでは最大の 17 インチで、ビデオ・オーディオ・ゲーム用機能を省略した事務用の高性能機です。早速、この会報の編集に利用しました。

これまでの“わ”の会パソコン

かつて、会員から“わ”の会用として、ノートパソコンとプリンターの寄付を受けました。会報 12 号(2005/2)に掲載した「ノートパソコンご寄付のお願い」の記事に対して、不要になったものでよければということで譲受けたものでした。基本ソフトは Windows 95 か 98、プリンタは初期のインクジェット式でした。当時は Windows XP が広がり始め、インクジェットプリンタの性能が急速に伸びていた時期でありました。そんな時期の旧機種で使い勝手があまり良くなく、残念ながらほとんど実用に供せませんでした。

そのような事情で、これまでは、

- ・学習会会場でノートパソコンが必要な場合は、区民活動センターや会員個人からの借用、または講師の持込み。
- ・運営委員会などの会議で必要な場合は、区民活動センターから借用、または運営委員の持込み。
- ・会報編集で共同作業をする場合は、個人宅に集まって個人のデスクトップパソコンを利用していました。

これまでの問題点

- ・パソコン画面を見ながら会報編集作業を複数人で行うときは、デスクトップパソコンを所有する個人宅に集まって作業をしていまし

た。そのため、奥様などにいろいろと気遣いを頂いたり、作業が長時間になったり、ご迷惑をかけたり、気兼ねをしながらの作業でした。

- ・講師持ち込みのノートパソコンを利用した学習会のケースで、講師の意向で事前のプロジェクターとの接続確認を省略し、会場で講演開始の直前に接続してみたらトラブルが発生し、講演開始が遅れたうえに、正常に機能しないままでの進行となったことがありました。
- ・会員所有のノートパソコンを借用したときは、本人または本人以外の持ち運びや使用中に破損や故障が生じる可能性があり、この場合は気まずいことになる危険がありました。

大画面ノートパソコン購入効果

- ・地区センターなどの公共の場所で会報編集などの作業ができるようになりました。
- ・学習会の前日に接続確認などのリハーサルがやりやすくなりました。
- ・故障や破損が生じた場合の処理が進めやすくなりました。

購入したノートパソコンの仕様

ソニー VAIO E シリーズ

画面：17 インチ液晶（1600 x 900 ドット）、寸法：40 x 3 x 27 cm 重量：3 kg

基本ソフト：Windows 7

価格：約 9 万円（本体、統合ソフト（Word、Exel、PowerPoint）、ウイルス対策ソフト）



学習会の概要とアンケート結果

第7回「金沢地域の近代文書を読み解く」

開催日：2011年11月12日（土）

場 所：能見台地区センター 多目的室

講 師：横浜開港資料館 調査研究員 松本洋幸氏

出 席：85名（ビジター1名）会員の出席率 60.6%

概要

明治44年から大正3年まで六浦荘村の村長を務めた布川悦五郎が理想の模範村を目指して行った地方改良運動、教育機関の充実などを、彼の日誌や「六浦荘村報」などの文書を通じて分かり易く解説していただいた。

特に自分が教員をしていた釜利谷小学校の環境整備から教育の充実まで見事なリーダーシップを発揮した。村を挙げて教育をバックア

ップするために、同窓会や校友会、学童保護義会などの団体を立ち上げ、現在の学校便りにあたる「釜利谷小学校 学事報」を大正2年に作るなどその手法は極めて新しい。この他、陸路の改修や電灯の点火など村政に数々の業績を残したが病気のため辞職届を出し43歳の若さで亡くなった。彼の辞職届に志半ばで倒れた布川悦五郎の無念さがにじみ出ている。（伊達）

アンケート結果

全体評価 大変良かった：27 良かった：10

- ・地域に密着した事例で分かりやすかったという声が多かった。
- ・特に布川村長の先見性に立脚した指導力と、具体的な改革手法の見事さが深い印象を与えたようだ。
- ・アンケートの提出率が50%を切っているのが気になる場所である。
- ・今後の学習会に反映させるためにももっと多くの方の提出を期待したい。



松本 洋幸氏

「寺社を巡る会」10周年記念講演要旨

熊谷 哲

金沢北条氏

鎌倉幕府を動かした人々



講演会風景 吉田純一氏撮影

主催：“わ”の会の分科会「寺社を巡る会」

日時：平成23年11月21日 午後0時30分～2時30分

場所：能見台地区センター 多目的室

講師：県立金沢文庫 主任学芸員 文学博士 永井 晋氏

昭和34年、群馬県生まれ。

現在 神奈川県立金沢文庫主任学芸員・横須賀市文化財専門審議会委員

専攻は、日本中世の政治史・経済史、金沢地区・三浦半島の近代史も研究。

代表的な著書 『金沢北条氏の研究』（八木書店）

『鎌倉源氏三代記』（吉川弘文館）

『北条高時と金沢貞顕』（山川出版社）

出席：68名

講師が強調されたこと

金沢北条家は全国に展開した大武家で、おらが村の殿様(三浦氏などのような豪族)ではない。

審海と称名寺創建・金沢文庫創設などを成し遂げた第2代の実時は、鎌倉幕府執権の経時・時頼の腹心として幕政を支え、鎌倉時代の全盛を体現した賢臣であった。

宮騒動、霜月騒動、平禅門へいぜんもんの乱以降、第4代の貞顕は、六波羅探題・瀬戸橋架橋・称名寺の興隆を進め金沢北条氏の最盛期を築いた。さらに連署・執権と進み、政権の中枢にあって高時と共に幕政を運営した。正慶2年(1333)東勝寺で一族と共に自刃(幕府滅亡)。

第5代の貞将は幕府の中枢としての将来を期待されていたが、幕府滅亡直前鎌倉で戦死した。

金沢北条氏は鎌倉の武家文化を象徴する多くの文化遺産を残している。鎌倉の世界文化遺産登録にも関わりが深い。

1. 金沢北条氏という呼び方

・『太平記』(室町時代に成立)が北条実泰流の人物に金沢を冠して記載したことから「金沢氏」という呼び方が一般化した。俗称ではある。

・鎌倉時代は「どこに住んでいた何某」とか官職や役職名で呼んでいた。

・実泰は蒲谷殿、実時は称名寺殿、顕時は赤橋殿と呼ばれた。赤橋は鶴岡八幡宮の入口の橋でこの橋の南西に館があったとみられる。

・金沢北条氏の本拠地の館は金沢、赤橋は鎌倉での公務の館で、貞顕・貞将もここを館としていたらしい。

・金沢氏の女性には「金沢何某」の記録がある。

2. 金沢北条氏の系図

・北条義時の子実泰を初代とする北条氏の分家、実泰—実時—顕時—貞顕—貞将—忠時である。

・金沢家は、顕時が赤橋亭を賜ってからは赤橋家というのが適切であるが、前述のように室町時代以降「金沢氏」と記された。

・分家に甘縄家と鎮西金沢氏がある。甘

縄家の有力者は東勝寺で自害している。

鎮西北条氏は異賊征伐のため博多に派遣された北条実政・政顕の系統だが家名は不明。鎮西北条氏から規矩氏・糸田氏など分家が成立していたが建武1年(1334)北九州で反乱を起こし鎮圧されている。

3. 鎌倉幕府に勤めた金沢北条氏

・第4代将軍(摂家将軍=藤原頼経)以降、将軍は祭祀、執権・連署が政治を取り仕切った。

・金沢北条氏の初代実泰は幕府の小侍所別当(長官)を勤めた後、釜利谷に居を構え、六浦を知行した。

・第2代の実時は、執権の経時・時頼の腹心として幕政を支えるが、立場は命令権を持たない補佐役であった。因みに実時の時代に朝比奈切通が開削されている。

・宮騒動・霜月騒動・平禅門の乱の後、第3代の顕時は幕政に復帰するが、直ぐに引退して仏道に励んだ。

・第4代貞顕は「引付頭人→六波羅探題→連署→執権」と昇進し、命令権を持つ幕政の運営者へと地位を向上、高時と共に幕政を主導する立場となり、能吏として

政権を運営した。「引付頭人」とは幕府の訴訟審理機関の長官をいう。貞顕は瀬戸橋架橋に成功した。これは得宗家の強い意向を受けた事業であったが、これにより北条一門による六浦津と六浦庄の支配に大きく寄与できた。

・金沢北条氏は武蔵国六浦庄や下総国下河辺庄の他、伊勢・近江・九州など全国に所領を有する大きな武家となっていた。

4.連署という役職

・貞顕は執権高時の時に連署を勤めた。
・連署は執権の補佐役ではない。連署は次席の執権として幕府の公文書に花押をすえる。公文書には関東御教書・関東下知状などがある。それらの書状には執権・連署連名の署判が必須である。現在の副総理以上の役職である。それ故、執権・連署をあわせて両国司・両執権という。

・花押(かおう)とは本人の象徴として書き加える一種のサインである。

5.略史(レジュメから抽出)

1208(承元 2) 北条実泰誕生

1224(元仁 1) 伊賀氏事件、金沢家成立

1246(寛元 4) 宮騒動、実時、寄合衆

1256(康元 1) 実時、引付頭人

1275(建治 1) 北条実政鎮西に下向し鎮西探題

1285(弘安 8) 霜月騒動、顕時失脚隠棲

1293(永仁 1) 平禅門の乱、顕時復帰

1302(乾元 1) 貞顕、六波羅探題

1315(正和 4) 貞顕、連署

1324(正中 1) 正中の変、貞將上洛、鎮庄

1326(嘉暦 1) 嘉暦の騒動、貞顕執権、後出家

1331(元徳 3) 元弘の乱、貞冬上洛楠木征伐

1333(正慶 2) 幕府と北条氏滅亡

1334(建武 1) 規矩・糸田の乱(北九州)

1353(正平 8・文和 2) 潜伏していた北条時行捕えられ竜口で斬首、北条氏嫡流の断絶

6.系図

金沢氏、金沢氏婚姻関係、天野氏、遠藤氏、長井氏、安達氏の6系図をレジュメに記載

「寺社を巡る会」駿河路バス旅行記

浜崎 弘和

「寺社を巡る会」恒例の、特別バス探訪として今年度は“駿河路の寺社を訪ねる”をテーマとして11月25日実施された。当日は雲一つない素晴らしい秋晴れで幸先の良い出発を迎える事が出来て旅の最大の味方は天候である事を実感してのスタートでした。

金沢文庫を出て一路、横横道路、東名・横浜町田 IC から東名高速を走り富士山の全景を右手に見ながら静岡 IC に到着。静岡浅間神社を参拝、見学。ここより現地ボランティアガイド2

名の方に清水地区まで同行して頂いた。

この神社は浅間神社、神部神社、おとしみお大歳御祖神



静岡浅間神社

社の三社を総称して静岡浅間神社という。

何れも創立は千古の昔にさかのぼり、駿河国総社として信仰されている。この境内には七神社(浅間・神部・大歳御祖・麓山・少彦名・八千戈・玉鉦)祀られており、少なからず驚きました。どれも漆塗りの極彩色で特に楼閣造りの大拝殿は浅間造りの代表的なもので豪華そのものであり、境内の建築物 26 棟が重要文化財であった。

次に日本平へ。“富士山眺望日本一の日本平”



日本平で集合写真

と称されるだけあって見事な絶景であった。その頂上で名物の桜海老の料理で昼食を摂り全員で記念撮影後ロープウェイにのって東照宮へ。

「久能山東照宮」は祭神・徳川家康を祀り元和3年(1617)の創建で社殿の屋根は青銅葺きで、朱塗りの柱を持つ権現造りで、権現造りの最初の建造物である。建物全体にわたって緻密な彫刻が彩色豊に施されている。境内には国宝・重文の建物が数多く点在して豪華絢爛な佇まいであった。

東照宮参拝、見学後は観富山龍華寺に行く。徳川家ゆかりの寺で創建は寛文10年(1670)。徳川家の縁戚で日近上人が開基で日蓮宗である。本堂・庭園ともに立派なもので、紀州徳川頼宣・水戸徳川頼房が寄進した。二人の生母であるお萬の方との縁によるものであろう。10

余年をかけて造られた東海道の名園の一つであり、天然記念物の大蘇鉄や大サボテンは見事であった。龍華寺をあとに更に徳川ゆかりの清見寺に向かう。

JR 興津駅近くにある清見寺は正式には巨麓山清見興国禅寺で奈良時代に創建された東海道屈指の名刹。白雉年間(650~654)に東北の蝦夷への備えとして清見関きよみがせきが設けられ、その関所の鎮護としての仏堂が寺の始まりといわれている。足利尊氏はこの寺を深く崇敬し、更に駿河領主の今川氏も手厚い保護をした。徳川家康が今川家に人質として年少時代を過ごし、当時の住職で軍師でもあった大原雪齋から教育を受けたのもこの寺で、家康が使用していた三疊間を見ることが出来た。この寺は東海道の目前にあることから朝鮮通信使や琉球使の接待にも使われ、通信使遺跡は国指定の史跡であり庭園も国指定の名勝となっている。ここで



通信使遺跡庭園

の拝観、見学が丁度夕刻になり本堂に隣接した方丈二階から見た駿河湾の夕陽は素晴らしく、通信使遺跡は未だに目に焼きついています。その夕陽と共に一路、バスは金沢文庫へと向かいました。

今回の特別バス探訪は、何れも素晴らしい神社仏閣ではありましたが、何と言っても秋の一日は陽が短くて駆け足の参拝、見学で時間が足りないのが残念でした。又の機会に是非じっくり見学したいものと思っています。



「寺社を巡る会」

初冬の駿河路は太陽がいっぱい

渡邊 紀一

駿河路が計画された時、即座に思い出されたのは三、四十年も前に遡るが山岡荘八著「徳川家康」のことだった。お読みになった諸兄も多いと思う。しかし、一方で挫折した方も多いのではないか。私も一度は手にした一人である。その頃「徳川家康」はブームの渦中であって世の有名著名人の読後感が新聞、雑誌に掲載され、喧伝されていた。ビジネス書、経営の虎の巻等とも言われて人気を煽っていたように思う。これを読まずして日本人に非ずと云ったような過激なものまであった。バスに乗り遅れてはならじと行く先も確認しないまま飛び乗った。この小説は天下統一の覇権を目指す武将たちの策略と権謀を駆使して繰り広げる組(く)んず解れ(ほぐれ)つの壮大な国盗り物語である。人物が縦糸に横糸に複雑に綾なして、絡んだ糸口を見だせぬまま、時々は遡って読みなおし、復習をしながら遅々として捗らず(3頁読んで2頁読みなおし)。また、途中聞いたこともない人物が登場したりして、全26巻の半分にはさらに遠く、飽きを感じてしまった。文字を追っているだけで敢え無く断念した。呪縛を解かれたようにさばさばと、鬱屈が晴れた。駿河路を往くバスの中でこんな事を思い出していた。富士山には雪を頂き、幾何学模様に青々と刈られた茶畑や山の中腹にまで駆け上がりそうな勢いのみかん畑、駿河路の初冬の裾模様である。

バスガイドさんの駿河の国の景勝・歴史や、森の石松等挿入話を聞いていると、高田浩吉、堺駿二、美空ひばり等がとVサインを翳(かざ)しながら松林の陰からひよい顔を出しそうな

そんな陽差しである。これは「東映娯楽巨編時代劇総天然色」の絵柄である。あの頃こんな絢爛たる文字がポスター一杯に躍っていた。

話は脱線する。時々脱線する。恬(てん)として恥じない。

山岡荘八と云う人、静岡の人か愛知の人かと思ひ、インターネットで検索してみたがいずれの人でもなく新潟県は現在の魚沼市の出であった。大正9年高等小学校を中退、上京し博文館印刷所に文選工として働くとある。偉大な歴史小説家も一介の職工から出発していた。瞠目すべきは博文館である。大橋新太郎のあの博文館か。博文館は印刷部門にも経営の手を伸ばしていた。博文館の創立者佐平の長男として長岡に生まれ、14歳で上京、父の死後博文館第二代目社長となる、その後は我々が知っての通りである。大橋家の家風は、故郷の人を大事にした。経営していた多くの企業の中枢には故郷の人々を迎えた。愉快ではないか「徳川家康」が金沢と見えない糸で繋がっていたのだ。山岡少年は大橋家のどこかに伝手(つて)を求めて博文館に職を得たのだ。長岡市と魚沼市は遠い距離ではない。

閑話休題

金沢の古色蒼然とした瀬戸神社を見なれた目に静岡浅間神社は極彩色に施され、軽薄にさえ感ずる。浅間神社の探訪を一巡した頃、どこかに潜んでいたかのように観光バスが続々と境内に入ってくる。さながら夏の観光地の喧騒である。

日本平に向かう。

慌ただしい昼食を終えると「日本平」と彫られた碑をバックに集合写真撮影である。振り向けば駿河湾はあくまでも黝(あおぐろ)く、白く荒れた波頭に木の葉のように弄(もてあそ)ばれている漁船、冬の陽をいっぱい浴びた駿河湾である。この風景どこかで見たことがあると記憶がよぎった。富士が雪を頂いて泰然自若として日本一の貫録である。その頂上付近を薄く雲が棚引いている。思い出した、近所にあったあの銭湯の壁に描かれていた絵と同じだ。十歳ころまで銭湯に行っていた。当時、銭湯の壁絵は唯一、ゲージツと言えるものであった。今、見ている風景を伐りとって張り付ければ銭湯のあの絵となるではないか。ところで対を為す女湯の壁絵も富士なのだろうか。見たことはないが絶対にそうではないような気がする。日本全国に銭湯は数多あると思うが地方、地方の銭湯の壁絵にはどんな絵が描かれているのだろうか。オラガ自慢の山や海だろうか興味深い。静岡の銭湯は当然富士か？今時、銭湯の壁絵は過去の遺物になっていないだろうか。

久能山東照宮は豪華にして絢爛たる社殿であった。秋の陽は釣瓶落としの譬(たと)えの通り、復路のロープウエーから眼下 90 呎の底を見ようと高所恐怖症が人の肩越しに身を乗り出して覗こうとするが既に一筋の照射もなく真っ暗である。昔日、東照宮参詣には 1,159 の石段を上がってきたと云う。辺りを見渡せば柔らかな秋の陽が紅葉を照らしている。更に眼を東南に転ずれば駿河湾がキラキラと眩しい、その中を漁船が波間に揺れている。静岡と云う所、どこもかしこも煌めいている。

《観富山竜華寺》 境内には高山樗牛の墓がある。高山樗牛と云う人、もとは庄内鶴岡の人である。小生、鶴岡の生まれではないが亡き母は鶴岡の半農半漁の小さな村に生まれ育った。

その寒村に小学一年まで疎開した。90 歳になろうとしている叔父、叔母は健在で、煙たがられつつ街の若い人たちから重宝がられ、時には冠婚葬祭を仕切っていると云う。その子らも鶴岡から離れようとしな。鶴岡には親類縁者が多い。日常食べる海の幸は新鮮だが他には取り立てて産物はない。強いて挙げれば夕陽である。頂いた栞に「樗牛の遺言」なる小文が載っている。曰く「駿河国清水港付近竜華寺と申すは、三保の松原より富士山への眺望、本邦無二と存じ候(略)もし、小生死後に相成り候へば右竜華寺に埋葬願ひ度く候。素より故郷には祖先の墳域も有之候こと乍ら、彼(か)の陰鬱な禅宗寺は私の気には如何にしてもかなわず云々。要するに陰鬱な故郷の墓に入るを嫌い、風光明媚な駿河の土になることを望み、叶ったのである。本望ではないか。非難される話ではない、現在、都会で生活している殆どの人はそうではないのか。

《清見寺》 総門前に立つ、堂々たる偉容である。歴史の重み、奥深さが窺い知れる。我々の背後には興津港、清水港を従えた駿河湾が迫っている筈であった。それに気付かない。

本寺は昔、東北の蝦夷に備えて、この地に関所が設けられ清見が関と呼ばれたと由緒書は言う。その側に仏堂が建立せられ関所の鎮護とせられた。この仏堂を以って当寺の始めとなすと伝え、また再興せられた当寺は初め清見が関寺と称せられたと云う。石段を登り総門を潜り線路を右に見て左に折れる。既にグループの先頭は鐘楼を過ぎて本堂辺りに差し掛かっている。後れを取った。誇橋と云うのか陸橋と云うのか境内とを結ぶ橋を渡りかかったとき折しも清水側から哀しげに汽笛一声汽車が上って来る。貨物列車だった。積載物のない無蓋車を牽引していた。橋に顎を置いて珍しいものでも見るように見ていた。私には寺の境内から湧い

て忽然と姿を現したような錯覚を覚えた。驚いたのである。数分経たろうか長い時間を感じた。からからと貨物列車には似つかわしくない軽い音を残して過ぎゆくテールランプを見送った。不意に旅情を感じた。古希を迎えた男の淡い感傷である。

興津駅と隣駅清水との距離は 4.7 km である。指呼(しこ)の距離と云っていい。清見寺はこの両駅の間位置するとはいえ興津駅側にずっと寄る。東海道五十三次 17 番目の宿場である。かつて、東西両京を結ぶ鉄道計画の中で東京-名古屋間を中山道から東海道経由に変更された時、興津および、清見寺を持つ両市民は小躍りして喜び、誘致に走った。興津駅建設には、清見寺の境内の一部に乗り入れを必要とした。時の住職は献納した。

話はがらり変わる。

イチローが所属するマリナーズのホームグラウンドはセーフコフィールドと云う。この球場を汽車が通過する。イチローのファンでもあり良く中継を見る。時々、アナウンサーの音が掻き消されるほど大きな汽笛の音が入る。世界で二番目の開閉式・屋根付き・天然芝の球場だ

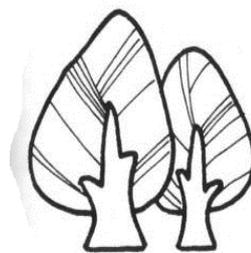
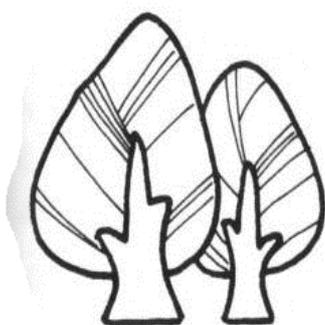
そうだが建設当時、既に敷設されていた貨物線の隣に建てられたため列車が通過するたびに屋根にこだまして球場に響き渡るのだと云う。因みに列車が通過するところを見たいものだが建物の陰になり見えないのかもしれない。

清見寺略由緒書を頂いた。名刹なのだろう。由緒豊かな寺である。庭にも曰く因縁がありそう。見事な佇まいである。

潮音閣からの眺望は印象的だった。陽はとっぷり暮れ左に伊豆の山が黒々とシルエットを為し、右に日本平が続く。不思議に伊豆の山と云うは古来、絵になり、歌に唄われ、物語の舞台となり、数えると枚挙に暇ない。伊豆には徳と云ったようなものが備わっているような気がする。

日本平辺りの山の端には辛うじて燐寸の残り火のような残照がかかっている。明るければ眼下に駿河湾と青々と広がる三保の松原が展開しているはずであった。

静岡と云うところ風光明媚にして名所旧跡の数多(あまた)ある所、圧巻は旅の終わりに清見が寺を選んだ、このたびの探訪の企画見事、恐れ入った。



「懐かしの映画」鑑賞録 No.5

「懐かしの映画を観る会」代表 佐藤 晃

平成 23 年度 第 15 回 鑑賞会

また逢う日まで

〈鑑賞日：2011・11・7〉

制 作：1950 年 東宝

上映時間：111 分

監 督：今井 正

原 作：ロマン・ロラン「ピエールとリュース」

脚 本：水木洋子

出 演：岡田英次、久我美子

あらすじ

戦争も末期、田島三郎（岡田）は学生で、召集を待つ身である。授業は行われず、学友の多くは戦場で戦っている。三郎は戦争に疑問を持っているが、口には出さない。父親は国家に忠実な裁判官であり、兄は学生時代、自由主義的な青年だったが、今は陸軍の将校で三郎が軍隊に行くことを喜んでいない様子を見て、叱りつけるほどである。三郎は心の苦しみを誰にも訴えることもできない。

ある日、三郎は街で空襲に遭い、地下鉄に避難し、その人ごみの中で押され偶然手に触れた蛍子（久我）と知り合う。蛍子は若い画家で、戦争宣伝のポスターを描くことを嫌って、雑誌の挿絵を描いて細々と暮らしている。互いに戦争に批判的な二人は直ぐに心が通じ合い、愛し合うようになる。二人は人目をしのいでデート

を続けるが、召集を間近に控えたある日、三郎は蛍子の家を訪ねる。つかの間の時を過ごし、三郎は蛍子の家を出た。雪が降っている。三郎が振り返ると蛍子は窓際でじっと見送っている。三郎は窓に駆け寄ると窓越しに唇を寄せた。蛍子も内側から唇を寄せてガラス越しに接吻をした。召集までの数日間、二人は逢う瀬を重ねた。召集令状が来て、入隊まで二日しかないことになり、三郎は蛍子の家を訪ねた。蛍子の部屋で、二人は将来を語り合うがそれが叶う望みはない。三郎は彼女が許したにもかかわらず蛍子を抱くことができない。戦死するかも知れない自分が彼女を抱いてはいけないと思ったからである。召集までの最後の一日、二人は逢うことを約束したが・・・

解説

戦後、日本映画の生んだ『反戦映画』の傑作である。戦争を批判する日本映画は数多く作られたが、その多くはイデオロギーが先行し、「戦争反対」を叫ぶ絶叫型の映画であった。昭和 25 年に作られたこの映画は、戦時下の若い男女の恋愛をストイックに描くと共に、戦争がいかに人間性を損なうものであるかを訴えている。

この映画の窓ガラス越しのキスシーンは日本映画史に残る名シーンであり、今なお語り草となっている。

この映画の原作はロマン・ロランの「ピエールとリュース」を水木洋子が脚色したが、戦後間もない時期なため、東宝は著作権を得るのが難しいとの判断から無断で映画化している。し

かし、このガラス越しのキスシーンはこの映画の創作である。「また逢う日まで」はキネマ旬

報ベストワンと毎日映画コンクール作品賞を得ている。

平成 23 年度 第 16 回 鑑賞会

○K牧場の決闘 Gunfight at the O.K. Corral

〈鑑賞日：2011・11・28〉

制作：1957年 アメリカ

監督：ジョン・スタージェス

主演：バート・ランカスター、カーク・ダグラス、ロンダ・フレミング

ジョー・ヴァン・フリート

あらすじ

3人のガンマンがフォート・グリフィンの町に来て、ドク・ホリディ（K・ダグラス）を仇として狙っている。たまたま所用で町に来たワイアット・アープ（B・ランカスター）はドクと愛人ケートの危機を救った。ワイアットはドッジ・シティの保安官を勤めており、ドクが命の恩人だとワイアットを慕ってドッジ・シティに現われる。この町に女賭博師ローラ（R・フレミング）が来る。女賭博師を許さないワイアットは留置所に入れるが、ドクのとりになしでローラは釈放される。3人の無法者が町に来たが、ワイアットはドクの助けで仕留める。ワイアットに恨みを持つ牧場主の上海ピアスが牧童たちを多数連れて街を占拠しワイアットは苦境に立つがドクに救われる。この事件の後、ワイ

アットは保安官を辞め、ローラと結婚を決意する。

そのとき、トゥームストーンにいる兄のヴァーゼル・アープから助けを求める電報が届く。トゥームストーンではアイク・克蘭トンと頭とする牛泥棒一味が町を脅かしている。ワイアットはローラと別れ、兄を助けるため、トゥームストーンに向う。ドクは追いかけてきて途中で合流する。町に着いたワイアットは町の保安官が克蘭トンに懐柔されているので、対抗上、連邦保安官になる。克蘭トン側はワイアットの闇討ちを企て、誤って弟のビリー（D・ホッパー）を殺す。ここからOK牧場の決闘の火蓋は切られた・・・

解説

アメリカ西部史に残る保安官ワイアット・アープと賭博師で早撃ちガンマンのドク・ホリディが、アリゾナ州のOK牧場で無法者たちを撃ち殺した史実に基づく「OK牧場の決闘」は、これまでもいくつか映画化されている。1946年にはジョン・フォードによって「荒野の決闘」が作られ、その後11年を経て、ジョン・スタージェスは同じ題材でこの映画を作った。西部の大草原を馬に乗った3人の男がフランキー・レ

インの歌と共に現われる冒頭のシーンから、クライマックスのOK牧場の決闘に至るまで銃撃戦が続き、西部劇のガンマンファンを喜ばせてくれる。スタージェスのスタイリッシュな演出とワイアットを演じるバート・ランカスターとドグ役のカーク・ダグラスの掛け合いも楽しい。OK牧場の決闘のあと、克蘭トンは逃げ延びるが、最終決戦をスタージェスは「墓石と決闘」（1967年）で描いた。

田園交響楽 La Symphonie Pastorale

〈鑑賞日：2011・12・12〉

制作：1946 年 フランス

上映時間：108 分

監督：ジャン・ドラノア

原作：アンドレ・ジイド

出演：ピエール・ブラッスール、ミシェル・モルガン、リーヌ・ノロ

その他：1946 年カンヌ映画祭グランプリ、主演女優賞（M・モルガン）

あらすじ

雪の深いスイスの山村の教会の牧師ジャン（P・ブラッスール）は、老婆が死んだので祈祷をしたが、後に盲目の孫娘が残された。ジャンの目に映ったのは、髪は乱れ、顔は汚れ、食事は手を使わず、犬のように口でむさぼり食べる少女であった。ジャンはこの子を見捨てられないと家に連れて帰り、ジェルトリュードと名前を付け、育てることにした。ジャンの手で躰けられ、教育されたジェルトリュード（M・モルガン）は成人して、蝶のように美しい乙女に変身する。ジャンの妻アメリー（L・ノロ）は夫のジェルトリュードへの愛を、神の子羊に対する牧師としての愛以上のものと直感的に感じ、不安と嫉妬を覚える。その頃、ジャンの息子のジャック（ジャン・ドザイ）が長い海外留

学から帰ってきた。ジャックには許婚のピエット（アンドレ・クレマン）がいるが、成人したジェルトリュードを見て、その清純な美しさに心が奪われる。若い二人は急速に親しくなり、ジャンは息子の気持ちを感じると、これ以上親しくなることを禁じる。ジャックは家を出た。

ある事件のあと、ジェルトリュードが目の見えない不自由さをジャンに訴えた。その時、ジャンはこれまでジェルトリュードの目を治療させなかったことを後悔し、医者への診断を仰いだ。その結果、盲目の原因は白内障であり、手術すれば目が見えるようになることであった。手術は成功し、ジェルトリュードは開眼した。彼女が最初に目にしたのは・・・

解説

フランスの文豪、アンドレ・ジイドの名作の映画化である。祖母に死なれ、身寄りのない盲目の少女が牧師の家に引き取られ、自分ではどうにもできず、運命に翻弄される女の悲劇を、端正な演出でジャン・ドラノアが描いた。最初純粋な慈悲心から少女を救った牧師は、成人した少女を愛さずにはいられなくなる。人間的な悩み、エゴイズムはまた、相手をも苦しめる。「田園交響楽」はこの映画に登場しない。ジイドは執筆当初『盲人』の題名を考えていたというが、途中から題名を変更したという。「田園交響楽」はベートーベンの標題音楽である。この交響楽に示される田園風景は美しいが、『あの得もいわれぬ諧調は、あるがままの世界を描

いたものでなく、罪と罰がなかったら・・・こうもあろうという世界を写したものであるまいかと考えていたのである』（田園交響楽・アンドレ・ジイド、川口篤訳岩波文庫）。ジェルトリュードは開眼して罪を意識し、死を選んだのである。

ミシェル・モルガン（1920～）はジャン・ギャバンと共演した映画『霧の波止場』（1938年）で映画スターの座に上る。以後主な出演作は『狂熱の孤独』（1953年）『花咲ける騎士道』（1955年）がある。現在は映画界を隠退し、趣味の絵画、詩作に耽り悠々自適の生活を送っている。

「浮雲俳句会」抄録 No.16

「浮雲俳句会」代表 北野 清市

【5つの「俳句の型」】

作句も5年前後になると、それぞれの作風が出てくるものである。従って、毎月メンバー各人から提出されるトータル70句程を選句する場合、この句はA氏のもの、この句はBさんのものとおおよそ分かるようになる。これはメンバー各人の作風の固定化に起因した結果である。しかし、更に高く広いレベルの作風を作り出すためには、先達の名句の型に挑戦して、これを身につけることが肝心である。

以下は、【5つの「俳句の型」】が、句会において一巡したので、メンバーの事例を紹介して置く。

(芭蕉型) = オール名詞

昭和史を肴に老女忘年会 (とも女)

(子規型) = 形・名・動・名

さまざまな色絡み会ふ落葉かな (一椀)

(虚子型) = 名・名・動・名

さざなみの湖面を渡る鳴の声 (二祥)

(桃邑型) = 動・名・名・名

迎えたる万余の御霊茄子の馬 (十九)

(風生型) = 名・名・名・動

屋敷蛇樹上に衣を懸けのこし (重九)

【月例俳句】

俳句の原点は、“季感(季語)”である。それだけに、今年度の編集のポイントも、ここに立脚。5月(皐月)・7月(文月)・8月(葉月)・9月(長月)・11月(霜月)それに12月(師走)と続けてきた。そして来年は、1月(睦月)・2月(如月)・3月(弥生)それに4月(卯月)と一巡して参りたい。

北鮮のある地球儀の煤払ふ 一清

12回金沢区民俳句大会吟行会への参加 (H23年10月30日)

〔秀作〕

今回の区民吟行大会は、晩秋の晴天に恵まれ

天賞 爽籟や闇ひつそりと掩体壕 十九

野島公園界限で実施。多くの結社から参加頂き、

地賞 釣り上ぐる糸のしづくや鯨の秋
(他の結社)

秀作の3賞中、天賞をわが浮雲俳句会のメンバーが勝ち取った。

人賞 秋光や房総を背にコンテナ船
(他の結社)

<掩体壕>は、戦時中戦闘機を敵の空爆から守るため、野島山の東西をトンネル状に堀り貫い

た壕。この<掩体壕>が 65 年余り経った今日、俳句の舞台に登場したのである。私も当日大会の会場に向かう途中、<掩体壕>の脇を通り、一瞬ハットして立ち竦んだのである。ところが、作者は、これに果敢に挑戦。真っ暗がりのトンネルの<闇ひっそりと>という措辞を得たのである。この点、<掩体壕>の外は青空、内は不気味な闇。この両者の対比に成功。更に掲句は、たった 12 字の最短詩ながら、半世紀以上経過した戦時中と平和な現在との架け橋になる佳吟に仕上げた力量は見事である。

[特選]

稲荷社の階に見ゆ秋思かな (他の結社)
 紅葉忌や明治の句ふ博文邸 一馬
 秋草を活けてもてなす博文邸 とも女
 鯉跳んで野島の影を輪に移す 十九
 篋の列整然として天高し (他の結社)

ここでも、わが「浮雲」のメンバーの句に絞ってコメントしておきたい。

先ず、2 句目は吟行先に因んだ忌日俳句と囑

目吟のコラボレーション(結合)。尾崎紅葉(小説家・有名な『金色夜叉』の作者。俳人でもある)の忌日は明治 36 年 10 月 30 日。丁度吟行大会のあった 10 月 30 日とダブル。加えて、吟行大会で立ち寄った<博文邸>(伊藤博文は勿論明治初代の内閣総理大臣。その乙舳町野島公園の一角にある別邸)の主と、紅葉を、恰も乃木大将と敵の將軍ステッセルの会見のように、明治を代表する御仁を対峙させ、遠くなった明治を偲んでいるのだ。

次に、3 句目は同じく<博文邸>における囑目吟。普通は見過ごす対象も、鋭い女性の感受性か。<秋草を活けてもてなす>状態を発見。俳句のポイントに収めた業に感服した。

次にまた、4 句目は臨場感溢れる囑目吟。<鯉>が水面を跳びハネた瞬間に着目。次の瞬間には、<野島の影>になっている水面に水紋を広げ、<輪に移>したのである。<輪に移す>という巧みな表現により、俳意の深い句となった。

十一月(霜月) H23 年 11 月 27 日

11 月は、俳句では、8 日の「立冬」から始まるといってよい。

かうばしくトースト焼けて今朝の冬
 (子規型) 一清

(以下第 54 回例会の投句)

落葉踏む音に命の響あり 一清
 さまざまな色絡み合ふ落葉かな (人賞) 一柁

ベランダに一人さまよふ枯葉かな 勇平

11 月の初めは、<落葉>や<枯葉>の最盛期である。人里離れた雑木山を歩くと、赤・黄・茶など<さまざまな色>の<落葉>でいっぱいだ。大自然の芸術作品というか。天地の贈物の錦織

りなす絨毯の上を、踏み締める贅沢さを満喫する。

わびさびの庭に山茶花炎のごとし (特選)

一幸

千両の色切り取りて花鈇

三旦

一方、初冬には、椿に似て小型であるので「ひめつばき」と呼ばれ、茶の花に近いので「茶梅(さざんくわ)」といわれる<山茶花>が、庭などで盛りを迎える。しかも、庭には赤い実の美しい<千両>や<万両>が目を楽しませてくれる。

勦き冬雲迫る掩体壕 (特選)

一馬

冬雲のひとつに翳る山の駅

一清

冬帝や「金沢村」あり奥秩父 (特選) 重九

他方、冬への佇（ただずまい）も急で、野島の掩体壕には、<冬雲迫り>、<奥秩父>では、むかし金沢区にあった「金沢村」と同名の<金沢村>を発見。それは<冬帝>時代の<奥秩父>であった。

房総は風の半島鷹迅し 一清
鷹の目の一閃残し飛び出せり（特選）とも女
群なして伊良古崎を差羽飛ぶ（特選） 岩介
乾坤を一気に繋ぐ狩の鷹（天賞） 十九

更に、初冬は野鳥たちの渡りの季節。本年度の兼題「野鳥シリーズ」の第3弾として、11月は「鷹」にトライした。この点「鷹」は、種

数も多く、列島を南方に移動するいわゆる夏鳥の飛翔と、冬鳥の渡りのグループが交錯するシーズンである。芭蕉も<鷹一つ見付けてうれし伊良古崎>の名句を残している。

新しき日記買ふなり古書店（地賞） 二祥
読みかへす『坂の上の雲』霜夜かな 一清
更にまた、今月は、当然ながら12月へのパトンの月。<新しき日記>を買って年越しの身边整理をし始めたり、12月初旬から始まるNHKのドラマ「坂の上の雲」の完結編を見んと、司馬遼太郎の『坂の上の雲』を<読みかへ>したりした。

十二月（師走・しわす）H23年12月25日

一年の最後の月。極月とも師走ともいうが、段々と寒さが加わり年の瀬という感が強い。

風邪の熱五臓六腑を駆け巡る（特選） 好童
（以下第55回例会の投句）

登校の子ら一列に懐手（特選） 勝美
ストーブは猫の定位置漱石忌 一清

12月に入ると、気圧配置は西高東低、西に大陸の高気圧、東に低気圧があって、寒気がドット流れ込む。このような中、<風邪>がはやり、寒波に<登校の子ら>が<懐手>する光景が見られ、また<猫>は<ストーブ>が<定位置>になる。

裂く命育む命鷺の爪（天賞） 十九
大鷺の飛翔に影の追ひつかず 一清
犬鷺の孤高の雄姿王者なり（特選） 祥代

日本にいる鷺は、犬鷺・大鷺・尾白鷺の三種類。犬鷺は高い山にいて、冬場平地にも姿を見せる夏鳥である。これに対し、大鷺と尾白鷺は、主として北海道東北部を生活の拠点にして、海辺や河岸・湖岸などに生息している。それぞれ大きな翼があり、嘴が鉤形になっていて、獲物の肉を引き裂くのに適している。勿論鳥の王者である。

ぱたぱたと銀鱗はねる氷見の鰯（特選） 二祥

大き夢みるため山の眠りけり 一清
一方、山河の様子を垣間見ると、日本海では定置網に漁期の<鰯>が沢山獲れ、師走の食卓を飾る。また山は、来るべき年のため<眠り>についている。

昭和史を肴に老女忘年会（地賞） とも女
タクト振るトスカニーニの咳払い（特選）勇平
柚子風呂やぶかりぶかぶか童歌（人賞）国眼
師走も中旬を過ぎると、何となく年の瀬という感じが漂ってくる。<忘年会>で騒いだり、コンサートに出掛けて“第九”を楽しんだり、あるいは<柚子風呂>につかって一年の疲れを癒したりする。

浮雲の例会記し暦果つ（特選） 一馬
みちのくの大いなる喪や年暮るる 一清
今年（2011年）は大震災という未曾有の災害により、二万人もの尊い命が犠牲になった。また海外では、欧州においてユーロ崩壊が深刻化して世界に波及。更には12月中旬には、隣りの北朝鮮で金正日総書記が死去。代わって金正恩体制へと移行した。

(二) 三浦義村の妻は公暁の乳母であり、義村と公暁は親密な間柄。義村は公暁に実朝とライバルの義時を殺させて、公暁を將軍に立て幕府の実権を握ろうとした(『炎環』永井路子)

(三) 犯人がわざわざ大勢の前で名乗るのは不自然なこと。たとえ正義な行為でも神域を血で汚すことは神罰を蒙る恐ろしい行為。

犯人は実朝が進める公武合体路線に反対する東国の武士たち(『逆説の日本史』井沢元彦)

五、建保七年正月廿七日(実朝悲劇の日)以後『吾妻鏡』の記述の要旨です。

廿八日 京に使いを出し、実朝の死を報す 実朝至出家す 安達景盛

以下百余人出家す 実朝を勝長寿院の傍らに葬る

廿九日 鶴岡別当坊の悪僧らを糺断す

二月五日 下向の貴客ら帰京す

九日 去ぬる二日、京に入った使者帰参。

実朝暗殺の報、都を驚愕せしむ

十三日 幕府、皇子將軍の下向を奏請す

十四日 將軍家の政所焼亡す(失火)

三月一日 永福寺別当慶幸を鶴岳別当職に補す

十五日 將軍下向に関し北条時房上洛す。

七月十九日 左大臣道家の子(二才)頼経、関東に下向す。

右の記述で何か、お気づきですか。

事件の詳細な続報を期待して読み進めても何も出てこないばかりか四、五、六月が全くの欠文です。この三ヶ月間は何なのか。

重要な記事が無かった

都合の悪い事情があり書かなかった

後に誰かの指示で削除した

真実はいづれか、謎は深まるばかりです。

追伸

『吾妻鏡』は肝心なことを多くは語りません。口が重いのです。次回もつと不可解な「頼朝の死」です。

『吾妻鏡』を読む(3)

小倉 英明

一、「実朝の暗殺」の続きです

追手から逃れた公暁は実朝の首を持ち、後見人備中阿闍利の雪下、北谷の坊に向かいます。坊で食事を摂りますが、その間も首から手を放さなかった。

公暁は三浦義村に使者を送り、「空席の將軍職に私を推挙して」と依頼しますが、義村が北条義時に告げたことから、公暁は義時の討手により梟首されてしまいます。

二、「実朝の悲劇」に関する資料には様々な異同があります。

資料名	往・復路	場所	犯人
吾妻鏡	退去の時	石階の際	公暁
承久軍物語	復路	石はしに近づかせ給う時	美僧二人
愚管抄	復路	宝前の石橋を下りて公卿の列立したる前を行きける時	公暁の他三、四人
増鏡	往路	車よりおるるほどをさしのぞくようにして車中で	白きつす衣をまとい女装した公暁

『吾妻鏡の謎』奥富敬之(吉川弘文館より)

三、「実朝の悲劇」から九年後(西暦一、二二八年)『吾妻鏡』の記述です。

「安貞二年二月三日 丁未 霽る。將軍家鶴岡八幡宮に御参。(略)

供奉人は、武州、越後守、駿河守、大炊助、駿河前司(略)

また六位二十人、直垂ひたれを着して帯剣せしめ御駕の左右に列歩す。

これ去ぬる建保七年正月、右府將軍御神拜の時かくのごとき警固なきによりて事あり。向後用意あるべきの由、兼日に定めらるるが故なり」

(大意)

將軍頼経が鶴岡に参詣。お供は北条泰時、北条朝時、北条重時、

北条有時、三浦義村

次に六位の者二十人が武装して將軍の御駕(牛車)の左右を

囲んで進んだ。

これは去る建保七年正月、將軍実朝がこのような警護がなく事件に遭遇した為、以後改められたものである。

前掲の表、『増鏡』の状況に似ています。

四、犯人、黒幕は誰か。

將軍頼家が失脚した時(西暦一、二〇三)、実朝は十二才でまだ將軍職を狙うような年令ではない。親の敵かたき、父の敵と公暁に信じ込ませた黒幕がいるはず。

(一)事件の直前に心神違例を口実に難を免れた北条義時は一番に疑われます。

意外と身近な古文書・古典籍

沓掛 勝利

近年、生涯学習に関する市民の意欲が盛んになるにつれて、古文書を学ぼうとする人が増えているそうです。私もその一人になろうと、“わ”の会の分科会「古文書を読む会」に2001年3月入会させて貰いました。

古文書を系統立てて学ぶには、それなりのグループに入って、適切なテキストを使って学ぶ必要があります。

しかし、このITの時代、デジタル化した膨大な古文書・古典籍が多数の図書館、特に大学の図書館で公開されています。これらの資料をインターネットを利用して、楽しむこ

とを皆様にお勧めします。

“わ”の会では、2010年度第5回学習会において、会員「古文書を読む会」副代表 真田 雅行氏にテーマ「古文書に親しむ（入門編）」で講演をしていただきました。

この講演会資料を復習すれば、古文書に立ち向かう基礎的準備は十分です。

以下に、インターネットの古文書・古典籍のデータベースのほんの一部を記しますので、各自のお好みに合せてお楽しみ下さい。他にもさまざまなジャンルの資料が多数ありますので、ご自分で探してみてください。

- 古典籍総合データベース(早稲田大学)
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki>
書名（作者）
 - －絵図名所杖（山東京山）
 - －昔模様娘評判記（山東京山）
 - －好色一代男（井原西鶴）
 - －若衆振古跡鎗梅（山東京山）
 - －厚化粧万年島田（為永春水）
 - －好色一代女（井原西鶴）
- 望月文庫往来物目録・画像データベース(東京学芸大学)
<http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/mochi/mochi.html>
 - －女今川教訓鑑
 - －女大学宝箱
- 中村学園 電子図書館
http://www.nakamura-u.ac.jp/~library/lib_data/a01.html
 - －養生訓
- 国立国会図書館のデジタル化資料
<http://dl.ndl.go.jp/#classic>
書名（作者）
 - －浮世続（菱川師宣）
 - －夷国滑稽羽栗毛
 - －東海道絵図
 - －亜米利加使節対話写
 - －異国船渡来一件



会員の著書紹介

書名：俳句読本

著者：北野 清市

発行元：文芸社

発行日：2012年4月

体裁：46版、170頁

価格：1,200円

目次：はじめに

第1章 初心者編 1. 俳句とは 2. 句作 3. 俳句の表記

第2章 ベテラン編 1. 俳句の歴史 2. 三要件のクリア
3. 詩の表現技法 4. よい句・残る句

第3章 句会・吟行編 1. 句会 2. 吟行

内容紹介：

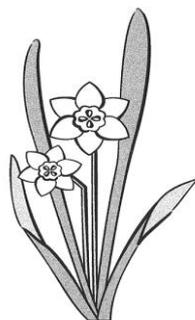
“わ”の会分科会「浮雲俳句会」は代表北野清市氏のもと20名で呱呱の声を上げた。爾来6年、その過程で北野氏が作られた250頁(A-4)にも及ぶテキストをハンディーな本に纏められた。

本書の第1の特徴は、句会の活動を踏まえた具体的な実用書であること。第2は、出来る限り多くの事例を採用したこと。第3は、俳句の基本的事項を中心に書かれていることである。

申込み：運営委員会へ（著者特価）

訃報

会員の天野晃一氏が1月にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。



行事予定

2012年3月～5月の予定

注：表中の「CC」は、「地区センター」の略

	3月	4月	5月
学習会	なし	なし	5月12日(土)能見台CC 定期総会9:30～10:40 学習会 10:40～12:30 道標で辿る“金澤道” 古文書を読む会 会員 伊達 一雄 氏
寺社を巡る会	3月1日(木) 集合:JR二宮駅 テーマ:二宮宿 行動:知足寺、曾我兄弟墓、 吾妻神社、川勾神社、一里塚 碑、等覚院	4月5日(木) 集合:JR平塚駅 テーマ:大磯宿 行動:善福寺、高来神社、 慶覚院、延台寺、六所神社	5月7日(月) 集合:JR小田原駅 テーマ:小田原宿 行動:小田原城・天守閣 歴史見聞館、報徳二宮神社 小田原文学館、松原神社
古文書を読む会	3月8日(木) 金沢公会堂 鹿島家文書 3月22日(木) 金沢公会堂 江戸期の相模・江戸地震	4月12日(木) 金沢公会堂 鹿島家文書 4月26日(木) 金沢公会堂 江戸期の相模・江戸地震	5月10日(木) 金沢公会堂 鹿島家文書 5月24日(木) 金沢公会堂 江戸期の相模・江戸地震
ふれあいの道歩こう会	3月15(木)～3月16(金) 茨城コース No.2 杉並木のうつくしいみち No.3 伝説の山と僧兵ゆかりのみち No.4 焼物とお稲荷さんへのみち (雨天の場合:29～30日)	4月19(木) 茨城コース No.5 自然林を歩くみち (雨天の場合:20日)	5月17(木) 茨城コース No.8 筑波連山縦走のみち(1) (雨天の場合:18日)
懐かしの映画を観る会	3月12日(月) 金沢 CC 12:30～ 眺めのいい部屋(仏) 3月26日(月) 金沢 CC 12:30～ 張込み(松竹)	未定	未定
浮雲俳句会	3月25日(日) 9:30～ 金沢 CC 小会議室 テーマ:「帰雁」北へ帰る雁 に挑む	4月29日(日) 9:30～ 金沢 CC 小会議室 テーマ:「雲雀」轉りの名手 に迫る	5月20(日) 9:30～ 金沢 CC 小会議室 テーマ:「時鳥」兼題のフイ ナーレ。古来からの時鳥で 飾る
パソコンを使いこなす会	3月6日(火) 画像処理基礎講座 —失敗写真の修整— 3月27日(火) Windows 基礎講座 —設定・トラブル解決— 9:30～12:00: 金沢 CC 予定	4月3日(火) WORD 復習講座 —①文字入力— WORD 基礎講座 —文字列の配置— 4月17日(火) WORD 復習講座 —②書式設定— 9:30～12:00 金沢 CC 予定	5月1日(火) WORD 復習講座 —③ワードアート I— 5月15日(火) Internet 基礎講座 —PICAS ウェブアルバム— 9:30～12:00: 金沢 CC 予定

各連絡先は前号を参照ください。

編集後記 会報発行から10年、継続だけでも大変な事なのに年々充実してきている。会員・先輩諸氏の努力の賜物でしょう。記念号の編集は個性豊かで多分野にわたる沢山の原稿を前にうれしい悲鳴でした。大変なエネルギーを要する「書く」という作業を難なくこなす会員諸氏に元気を分けて貰った気がします。会報第1号の後記に「会員の情報交換の場として活用」とあります。みなさんのさらなる投稿をお待ちしています。(IA)	発行日	平成24(2012)年2月18日
	発行月	4回(2, 5, 8, 11月)
	発行者	金沢区生涯学習“わ”の会
	編集長 編集委員	大門利晴 貝田誠作 田中徳明 伊達一雄 吉田寿紀 相川 勲 金間誠一